

僅か百人足らずの家政規模しか擁しない松平氏が、権謀術数あまねく屈強らとの覇権を競い、闘い、肅々と生きのび、いかにして天下を極めることができたのか。

『武功事紀』、『武功雑記』、『三河物語』など忠君美談や手柄話しも面白いが、本稿のねらいはむしろ、陽の目を見ることもなくむなしく生害した人たち、体制の中で大事にかかわりながらもつねに脇役に甘んじた人、汚名を被って役を外された者、事実を振じ曲げられ失脚に至った者など負を背負う羽目となった人びとに思いを馳せ、胸の内すら語りあかすことなく諳かに息絶えていった人たちの周匝と生き様を活写するところにある。

私は、それを確かめるため言問いの旅に出た。

そして彼らが行き交った往古の原景を訪ね、足しげく言問いを続けた。はじめ、彼らは私を拒絶した。しかし、ついに彼らは私を受け容れ固い口を開いてくれたのだ。

そして、久しくなおざりにされていた遺芳のこともが一斉に息を吹き返えし、驚くほど確かな原景を私に映しだしてくれたのだった。

私は速記者のごとく、ひたすらそれを書きとめた。

お分かりの通り本稿はあくまで私の随想的史観である。歴史研究書の類でないことだけはお断わりしておきたい。

本多作左衛門の原風景

藤原俊成雑記

太古から、三河国は水の災いが多いところである。

土地の人は皆そう思いこんでいた。なるほど領国の三分の一が山間で、信濃国境のあたりにいたっては千メートル級の峻崖が折り重なるようにひしめき合っているし、その狭隘を伝う雪解け水や湧き水は一旦中腹の山腹にたくわえられ、数日かけて分水嶺の巴山湖にたどり着く。そのたどり着いた水はやがて坳器から溢れ出、瀑布水となって豊川・矢矧川・男川の源流をなす。三河発祥の由縁である。

三川はそれぞれ高低斜面が緩なす東西領国の鑿地を縫い、土方いっぱいに速水をなし滔々と流下する。四季を通じてこの状態が保たれればそれこそ天恵の授かりものというべきだが梅雨時にこれが一変する。巴山湖の水壑が数倍に嵩を上げ、聞き狂った波濤が雷霆をとどろかせ、逆巻く濁流が瞬時に三河の村々を呑み込むのである。

この分水嶺跡には巴山白髭社（新城市作手と旧額田町の境界峠）があり、大水上御祖命のご神体祠、そのすぐそばに平安期三河国司を勤めた藤原俊成の歌碑が立っている。

神代より わき出る水の 巴川 いくちよへめと 知る人そなき

つるきたち 三河の水の みなもとの 巴山とは ここをいふなり

ともへ川 その水上を 尋ぬれば 薄の雫 萩のした露

俊成が訪ねた目的は何だったのだろうか。民を苦しめる暴れ川の鎮静祈願が目的だったのか、それとも単なる遊山であったのか、碑に刻まれた三つの詠歌に限っていえば、心の響き思いが何も伝わってこない俊成らしからぬ淡白な作である。

公卿補任記録によれば俊成が三河守に遷任したのは久安元年（一一四五）十二月三十日、三十二歳の時で、曾祖父が藤原道長、父が中納言藤原俊忠という名門藤原北家の出自にありながら同僚キャリアに比べるとすいぶん出世が遅れている。

和歌にこめた二束の草鞋がわざわいしたことも十分考えられるが、当の本人は傍が思うほど出世にはあまり関心がなかったのかも知れない。

三河の在任が在京型の遙任だったか国衙滞在型の受領だったか定かではないが、滞在説ではよく蒲郡竹谷・蒲形地区の大規模な荘園開発が挙げられているけれども、これだけの大事業が俊成だけの手で完遂できるはずもないし、歴代国司の継承事業であつたればこそその成功とみなければならぬ。

このころの俊成は崇徳・近衛両天皇の親近のもとで内裏歌壇の一員に参画、古今以来の優美な詞の世界を受け継いで男女の心の奥に揺れ動く情愛の物語性と抒情詩的な和歌の真髄探求に

傾注し、歌人としての地歩を固めようとしていた時期にあたる。そのさ中、從五位上に昇叙し出世の遅れを取り戻している。

おそらく俊成にとっては思いもよらぬ昇進だったことだろう。国司遷任には在京のまま国衛執務が許される遷任と、国衛に滞在して執務しなければならぬ受領があって、從五位下では国衛滞在型扱いとなるため、このボーダーラインでひしめきあう吏僚間のポスト争奪戦は苛烈をきわめる。ポストを勝ちとるか否かで将来が決まってしまう、謂わば、吏僚の登竜門でもあるのだ。

俊成の場合は異例中の異例というべきで、穿った見方をすれば皇室の後押しがあったとも考えられ、それほど俊成の内裏歌壇における評価と期待が大きかったのだらう。

その後俊成は、久安七年（一一五一）丹後守を最後に本省詰めとなっている。左京権大夫をかきりに主に皇后宮・皇太后宮の秘書官職を長く勤め、承安五年（一一七五）六十二歳で退官する時は正三位皇太后宮大夫職にあった。内裏歌人としての立場が履歴の上にも色濃く表われている。

晩年の俊成は、後白河院の院宣による「千載和歌集」の編纂をはじめ、歌学書「古来風躰抄」、「俊成卿和字奏状」、「古今問答」、選歌集「俊成三十六人集」、家集「長秋詠藻」、「俊成家集」と立て続けに著書を刊行し、また藤原定家、寂蓮、藤原家隆らの門下生を世におり出すなど、古き良き時代の回顧観想と万葉・古今集の流れを汲んだうららかに清華な境を築き上げていく時期で、俊成の人生のもっとも至福の時だったかも知れない。

しかし一方では、平安末期の榮枯盛衰の中で繰りひろげられる公達らの危うげな日々の無常と儚さを歌に託す自分の生き様と現実との乖離に、打ち解けぬ深い不安を抱きもっていた。それは自分と境涯を異にした人々との向き合い、関わりのことであった。其処ここで繰りひろげられていた現実にとれほど目をそいできただらうか、どれほど身を挺しころを開いただらうか、もっと手の届くところまで歩み寄ってその物心の息づかいを感じとらねばならなかったのではないのか、土とたたかう農夫らとの交歓においても本当の自分ではない自分の問いかけではなかったか、流行病で村境に隔離を余儀なくされ一家を訪ねようとしたとき目代や官人が止めなかったならば本当に一家を訪ねて病人に癒しの言葉をかけてやることできただらうか、摂るものもとれず生死をさまよう村人が最後の水を探し求めていたときなぜ従者に言いつけて竹筒の中の水をその口にそいでやることでできなかったのか、一つ一つのことが堰を切るようによみがえってきた。

そんなとき貴族社会を見限り未知の東北に身を投じた高望王のことが思い出された。

土と親しみ自由奔放に野を駆けめぐり本懐をとげていく先達の躍如たる生き様が痛痒く俊成の胸板を伝うのである。確かにあのドラステイックな、そして大胆奇抜な新地開発はなかなか土地の者には受け入れられなかったが、怯まず止まらず、前へ前へ、明日へ明日へ、如才のない親和力と心配りで地元民を牽引した。ひたすら事を運びつつ、為した事の形を示してそれを共有するのである。これが高望王スタイルというものだ。

この時代に生きる民は皆、万丈の思いで一日一日をしのいでいる。

《過ぐす》のではなく時を《しのぐ》のである。この現実を目の当たりにした高望王は目線を彼らに合わせ、共に目的を共有した。

俊成も高望王になろう、なりきろうと思うこともあった。だが、それを為すことは、高望王が中央に背を向けしめてはそれが末裔において政府の討伐を受ける結果をまねいたことにも通ずる。警え緩急に措置したにせよいづれ深みに陥り律令を侵すばかりか北家長家流を卑しめることにもなつたろう。

為すべき施しの機会はいくらでもあったのだが、禁断の殻を破る度量がなかっただけのことである。そのことが公僕として、また歌人として自分のベクトルを狭隘なものにしてしまっていることに気づき、深い省悟の念にかられるのであった。

いつの世も民はひたすらに生きる。それでも生きる糧を賄いきれないことが多い。それが常だ。

だからさらにひたすら丹精をこめる。

公僕が遊山三昧に現を抜かそうが見てみぬ振りをする。

自然の荒肆が立ちほだかるうがしっかりと向き合つて意を尽くす。

彼らはそれが生きるということだと思ひ込んでいる。

青立皆無が続いても彼らは毅然としている。

覚悟ができていたといたったほうが適切かもしれない。決して他を頼らない。

頼られた者に多少の貯えがあることが分かっている一日二日の食い扶持で事態が解決でき

るものではない。彼らは、草木と水で凌ぐ方が賢明だと考える。そのことは誰もが心得ている。苦しみを共有する勇気が彼らの大きな力となっている。

絆を深め災難と向き合い対峙することの大事が、究極のところで共生が成り立つ。

この強さ、逞しさは何なのか。その彼らの力はどこから湧き出てくるものか。

受領として地方巡りをしていた間にそれを確かめておくべきであった。俊成の後悔は尽きない。

所詮、貴族社会は廓のような小さな寄り合い組織である。律令体制は廓の仕組みを守るための縛りだったに過ぎない。個人の自由を担保に生業を保証しているが、制度が安定し成熟の蜜が彼らに行き届いている間はこれでよかった。

しかし、蜜が全体に行き届かなくなり、アンチテーゼを謳う第二第三の高望王が自立の道を歩めば、廓国家への済物・地子・色済・拳税が途絶え、たちどころに国帑が枯渇してしまう。

律令体制の法典には、

《預メ人民ニ諸般ノ法令ヲ示シオクヲ、令トイヒ職ニオイテ勤メ行フ次第ヲ集メタルヲ式トイヒ、令式ヲ犯セル者ヲ刑スル制ヲ律トイヒ、令、式、律ヲ時ニ随ヒテ改正変更シタルヲ集タルヲ格トイフ》

とあるが、律と令の籜が緩み、施すすべを失った途端、すべては気化し、もはや、失われた体制から新たな光は生まれない。

しかし、廓に入り浸った公達らは、移りゆく現実に目をそむけ楼閣の残り香に執念した。
〈この特権を捨て置くわけがない。必ず誰かが拾いに来る〉
と思い込んでいた。

何れの事どもも今となつては如何ともし難いことばかりであった。

其処にある現実に目を背け身をさらすことを等閑にしてきた付けは、今にして重く俊成の精神にのしかかつていた。出家は、出直しの選択だった。

だが、それは過去の清算でしかなかった。公僕本来の器量のなさ、不甲斐なさが情けなかった。この自分に失望した。挙措進退を決めてからの行動は早かった。引退後のことは考えなかった。

同僚の公達らは引退後の身の振り方で太政官府の高官らと頻繁に接触する光景が彼処で垣間見られた。それはまことに惨めな光景だった。

裏を返せば自分もあらぬ姿を見せているのではないか、自分が見ている哀れな公達らの戸惑う光景がそっくりそのまま生き写しに自分の姿として他の目に映しとられているのではないかと思ひ、顔を赤らめた。

結局、俊成は生業を清算し出家の道を選択したのである

俊成はなじみ難い時勢の埃を拒絶した。うろたえまいと必死で息を堪え、静穏を装った。そして歌の道に全身を投げ入れた。歌に打ち込むことで時勢の風を多少往なすことはできたかも知

しれないが、自分が佇たされている現実まで拭いさることはできなかった。

藤原俊成の救いは、吏僚として歌人として、己の足らんとすることに気づいた点だ。

俊成の晩年の歌には、地方への郷愁、働く民への思い、見過ごしてきた楚々とした観想を詠じた歌が光を放っている。

己の基点となる時代がまっていた。

天下国家を口にするにも己の言葉が重きをなす時代が。

それはあくまで己を捨ててこそ語ることのできる世界だった。人間一人ひとりの集積が国家である、とする新たな国家観で物を見ると、そこに何を見ることができるといった時代の意識だ。

ただし、それは力で特権を奪いとった者へのみ許された群雄割拠の時代だった。

巴山から岡崎へ戻る途次、寺野の山道に佇立する大楠、そして桜形から堅山に向かう山林に立つ大蛇の乱舞を思わせる根上がり杉をみた。これには思わぬ感動をもらった。

樹齢にしみついた往古の静まりが、私をつつんだ。

そして、俊成おぼしき公達が駿馬にまたがり稲田の畔をゆっくり通り過ぎてゆくを見た。

徳阿弥のこと

松平郷は、徳川氏発祥の地である。

開祖は上野国新田庄世良田出身の徳阿弥とくあみという諸国行脚の時宗僧で、応仁乱が起こる十五世紀中期ごろ諸国戦乱を逃れて転々とするうち三河松平郷にたどり着いたようだ。

三河国家の一人天野氏の「貞享書上」によれば、〈額田郡岩戸村出身泰親に仕え、天野孫七郎事先祖より代々参州岩戸村に住居仕候、御当家御先祖氏君関東より御浪人被成、参州松平郷御移住無程中山御手に入申し候〉

と、入村の経緯が記されており、

『松平氏由緒書』には、〈旅の途次、徳翁齊とくおうさい（徳阿弥・親氏）は松平郷にたどり着きしばらく松平太郎左衛門尉信重宅に逗留して諸国流転での見聞を語り聞かせ将来のことなどを問答するうち、徳阿弥は信重に乞われて娘の婿に入ることが決まったので、八橋に滞在中の弟祐金齊ゆきんさい（泰親）にこの旨を伝えて呼びよせ、この郷でそれぞれの家政を営んだ〉

といった意味のことが記されてある。

また、『尊卑分脈』、『寛政重修諸家譜』、『寛永系図（新田嫡流得河松平家）』、『舜旧記

（慶長三年七月十三日付）では、〈松平姓以前は得河・世良田・江田姓を名のっていた〉とあり入村前後の経緯はほぼ把握できるが、〈徳翁齊（親氏）・祐金齊（泰親）を兄弟〉としている『松平氏由緒書』、『徳川幕府家譜』、平野明夫氏などの論考と、親氏・泰親を〈父子〉であるとする研究者間の捉え方の違いはいまだ決着がついていない。

大久保彦左衛門原著の『三河物語』では、〈義貞が高氏に討ち負けたとき、徳河をおでになつて、迷える死者のように、どこと定まったところもなく、十代ほどここかしこ流浪なされておられました。徳の代に時宗になられて、お名を徳阿弥と申されました。西三河坂井の郷へ立ちよられ、お足を休められた。そのおり、さびしさゆえに、身分のひくい者に、お情けをかけられ、若君ひとりをもうけられた。そんなおり、松平の郷中に太郎左衛門尉といって、国一番の裕福な人がいた。どうした縁でしたか、太郎左衛門尉にひとりの娘がいたが、徳阿弥殿を婿にとり、跡とりになっていただいた。のちに坂井でもけた子を訪ね、対面したとき、疑いなくわが子だ。とはいえ、他人の家督を相続する以上は、長男とはいえない。家来にしよう。とおっしゃって、のちのちまで家老職となさったということ、たしかではないが、うわさに伝わっている（教育社原本現代訳から引用）と記し、『松平氏由緒書』の肝心部分である氏親・泰親については触れていないが、入村の経緯、太郎左衛門尉娘との間に生まれた子供のこと、酒井氏娘との間に生まれた子供の扱いなど、やや主観的に筆を走らせている部分も多々見られ、史料としての使いこなしはきわめて難しい。

太郎左衛門尉信重の村経営は、屋敷内に下人・所従を数人置き、用水、林野の管理、農民へ

の農機具・種子・食糧の貸し出し、生活相談など広範にわたる権限をもって在家衆、小百姓を統括する《在地小領主型村経営》であつたろうと思われるが、徳阿弥になつてからは共同体的村経営に転換している。

農業生産、新地開発において村全体の底上げが狙ひだつたものと思われるが、ただそれだけではなく農機具調達面で従来請鍛冶だつた者を村かかえの居職鍛冶屋に切り換えている点だ。農業者たりとも村を侵すものがあればそれを追いはらう力が必要と考えたのだらう。

農機具に手を加え、防具用の刃渡り具がつくられたとしてもおかしくない。村々を渡り歩く請鍛冶師では村の内実が漏れてしまう心配があつたのかも知れない。

諸国行脚で見た村の民は苦渋にみちていた。

徳阿弥は諸国村々の悲惨を、松平郷で繰り返してはならぬと思つた。

大きな力が小さな力をひと呑みにし、さらに大きな力がそれを略奪する。この延々と果てしなく繰り返される奪い合い社会の根絶を、この松平郷でやり遂げてみよう、《それが成るものか成らぬものか先ず、為してみなければ分からない》。

これが徳阿弥の発心であつた。

この時代、小さな田畑を繰り返しくりかえし耕すことで毎日をおくるただそれだけの村人には、朝廷・幕府内の権勢争奪で巻き起こす抗争などには遠地の出来事と捉えられていたし、戦場が村境を超え村域を侵して入会の野山田畑が荒されるような事態に及ばなければ平時の身支度で、泰然と野良へ出た。

戦は自分たちの生ることは何の関わりもない他界の出来事、神の徒が齎す天地動転と受流す器量が備わつていた。それもこれも、徳阿弥の導きが、そうさせているのだ。不慮の時代だからこそ、障礙からの解放を徳阿弥は願つたのである。不安、懼れを取りはらうすべは身命を賭してたたかうことである。徳阿弥の教えは村人の意識を変えていった。

徳阿弥が語る諸国風物詩の世界は、透とおつた柔らかな声音と奥深い風体としぐさに包まれ、不思議な時空だつた。話を聞いただけで気持ちになごみ、癒され、生きる力が湧いてくるのであつた。

時宗行脚で身に付いた徳阿弥の時勢の察知・見極め、そしてそれを包摂する理知が村人の心を開き未知の神妙な世界にいざなつて行く。

徳阿弥は太郎左衛門信重から家督を託された朝早く、一人天ヶ峰（豊田市松平町）に登つて天下平癒祈願をしている。そのとき経じたとされる願文が、《天下和順日々清明風雨以時災厲不起国豊民安兵戈無用崇徳興仁務修禮讓》で、爾後この願文がおりおり村人への講話の結びに論じこばとして用いられたようだ。

ごく雑駁には、《天下とうものは、和に順じて日々清明であるかぎり、災いなどは起こらぬ。そうすれば国は富み、民は安らいで、諍いも無くなるだらう。人はつねに徳を尊び慈しみの心で禮を厚くし人格の向上に務めなさい》という意味合いだらうか。

とにかく徳阿弥が現れたことで村人は自分の中にもう一人の自分を見る思いを感じるようになった。自分のすがた恰好はもろろん、こころの醜美、勧善懲悪がよく見えるのである。

さらには、生きることの意味、その理がおぼろげながら行動に表れている自分が意識できるようになっていた。それは、懿徳にみちあふれた朝の太陽のように神々しく、眩いものだった。しかし、貧しいという現実は何も変わらなかった。そこで徳阿弥が考えたことは貧しさの共有と、そこから如何にして浮揚し多少の蕃殖りを産すかだった。もとより、この課題は労せずして為るものではなく人手と時を要する。徳阿弥は村と村境の地勢を見て回った。そこで気付いたことは、松平郷の地形は、平場が少なく全体が小高い山と山が次々とおりかさなり、西の六所山と東の炮烙山に向かつて緩やかに反り上がっている地形であることが分かった。そして、山間の窪みには必ず水沼があり、潤沢な湧水が貯えられている。この地の利を巧く活用すれば村人の厄弱を弼くことが出来るかも知れぬと徳阿弥は考えた。

周禮の教本には、〈澮を以て水を蓄え、防を以て水を止め、溝を以て水を蕩し、遂を以て水を均し、列を以て水を舎し、澮を以て水を瀉し、渉を以てその芟を揚げて田をつくる、とある。これを手本にいたせば、懼れるものはない。先ずは、為さねばなるまい〉とある。

やがて頭の中の構想が煮詰められ棚田の原景に塗りがえられ、弥日異にそれが確信へと変わっていった。

徳阿弥は祐金齋を呼び、自ら描いた絵図面を開いて見せた。そこには棚田の様子が写しとられていた。事業の全貌とその目的を聞かされた祐金齋は興奮を禁じえなかった。

村の男たちが徳阿弥の屋敷に集められたのは、一年の農事が終わる十月十日のことだった。集まったのは徳阿弥家中五人、在家名主三人、小名主六人、小百姓三十三人、鍛冶屋一人、名

子・脇散在の者三人の五十一人だった。

女子の野良仕事には厳しい戒めがあり、もっぱら男の領分とされた。これは村に伝わる田と未の国 造神宿禰の律によるもので、巨石・巨木を崇め祀る習いのためであった。

徳阿弥は、祐金齋に話した通りのことを、村人にも話した。

従来の特田はそのまま領有できるが、今後の新地分は村全体の共有田とし、収穫物は公平に分割されること。ただし、分配された中の十分の三を村に備蓄用として納めることなどを伝えた。村人は両手を挙げて喜んだ。

もとよりこの事業が実際に松平郷で行なわれたか否かは疑問だが、この構想が練られたことは否定できない。厳しい村境の律の中での耕地は限られている。限られた中での新地可能な開発が繰り返されたことは充分考えられうる。当然、徳阿弥が棚田に目をそいだとしてもおかしくはない。東三河には今に残る四谷棚田（新城市）と長江棚田（設楽郡）がある。

事業の許認可について、徳阿弥はいろいろと手段・手管を思念したに違いない。三河にはまだ守護・守護代の政務所が置かれていなかったの得上京しなければならぬ。考えたすえ世良田との縁をもつ幕府政所執事の伊勢氏を頼ることになった。〈為せば成る〉徳阿弥は自らにそう言い聞かせ捨て身で伊勢貞継に拝謁を求めた。幸い面会が許され、畏敬と恭順の意を申し述べ、事業の許諾を得ていたのではないか。実際に松平氏と伊勢氏の誼が史料『蜷川親元日記』で検証できるのは三代信光の時期だからある。

徳阿弥の導きの根幹には慈愛があった。

「生きることは人と人の助けあい、働くことは生きるため、協働の中に規範と規律、喜怒哀楽を共有する、食を大事し無駄にしない、余った糧は蔵える、侵入者は追いはらう、共に生きとも死ぬ、流行り病者は山に移住させる、問題が起こったら知恵を出しあう」

といった素朴な教えである。この教えを互いに理解することで随分、村全体の風通しが良くなって情報の交換が行き届き、話題がふくらんで会話が明るくなったのである。まさに徳阿弥の蒔く種はしっかりと芽吹き、根をはり、彩り、豊かな花々を咲かせ、実をつけている。

一方で、徳阿弥は村の外のことにも触れることがあった。

一例を挙げれば、幕府の力が衰微し天皇踐祚・即位の大禮が執り行なえずにいる、といった、一つ一つの語彙を説かねば理解が行き届かないことに気付く。語彙の意味、当事者の出自・生い立ちの補遺、事件の経緯・是非などを噛みくだいて平易なことばに置き換えなければならぬ。その上で幕府衰退の原因の一つが国帑の行き詰まりであること、基幹にある全国莊園に課される口永・口米・貫納の運上の管理執行役である伊豆の北条、甲斐の武田、上杉、美濃織田らがこぞってお役を御免したこと、己の領土は自分が直接経営管理すること、こう積み重ねるように説明をする。

じつに根氣がいる作業だ。しかし徳阿弥は決して億劫がることはなかった。

すでに、徳阿弥の頭には百年後二百年後が視野にあった。将来の松平家を支えるつわものたちへの目が注がれていたのである。

つまり、徳阿弥の言わんとするところは、松平郷は村の領域であるが、同時に日本の領有で

あるという概念である。このときすでに徳阿弥の頭には群雄割拠時代が予断できていたとえる。いまの幕府がだめであれば、必ず次の新しい幕府ができる。そんなことはどうでもよいことである。肝心なのは、自立した松平家が存在し続けること、外敵から侵されたときそれをどう追い払うかではなく常にそれを押し返す力量が備わった松平家であること」

これが、徳阿弥が自分に課しているテーマであった。

草創期の松平氏

三河において松平氏が頭角をあらわすのは、三代宗家の信光時代である

その頃の松平氏は岩津、大給、保久(額田)を荘とする地下土豪ながら、時代の機微を嗅ぎとるに敏で、代々、惣領息子には京の伊勢氏へ出仕させて家政・財務を学ばせている。伊勢氏とは足利幕府政所執事を勤め政治心得の訓誨書『伊勢貞親教本』を著した伊勢貞親、武家殿中諸礼式・儀杖・兵杖・故実記『伊勢兵庫頭貞宗記』、『定宗聞書』を書いた伊勢貞宗など、時代の大事な節目で將軍を助けた名門家である。

この伊勢家と誼・被官の関係であることは將軍家陪臣と等しく、三河守護・守護代の権力下に置かれずに済むことを意味する。

これは杓子しゃくし・定規じょうぎ的強権・理不尽な下達に拘束されることなく、諸事万端切り盛りが早く、時間を取らずに捗る利便性があった。

土豪・地侍から有力国衆へのし上がっていくには、このぐらいの小狡さが必要だった。松平の人々にはその機智と才覚が備わっていたといえる。

寛正六年（一四六五）額田郡南部領の幕府奉公衆吉良義藤（東条）と幡豆郡吉良はすくき二ら一帯を領す

幕府軍治部少輔吉良義真（西条）間抗争に乘じた額田国衆の《反幕府・反吉良》一揆は、河全土の名主、大小領主ら国衆をも巻き込む危険を孕んでいたため幕府政所執事の伊勢貞宗は、被官の牛窪館主牧野貞成・松平館主松平信光・碧海郡上野館主戸田弾正左衛門ら有力領主に討伐を命じた。三人はいずれも地下上りの国衆、高家風をひけらかす吉良一族とはなじみ難い間柄で、三国衆が一揆鎮静に動いたのは吉良氏を助けるためではなく、あくまで伊勢氏被官としての加勢であった。

この鎮撫で信光は特段の働きが認められ額田郡南部の深溝・形原・竹谷・五井領と宝飯郡部の庄を伊勢氏から与えられた。また応仁元年（一四六七）西方軍の山名宗全・斯波義廉・畠山義就らが、松平宗家領の大樹寺近く井田野郷に侵攻した応仁の井田野合戦でも、信光はこれを迎え撃つ細川勝元・細川成之・斯波義敏・畠山政長・伊勢貞宗ら東方軍に参陣、伊勢氏の先衆一番手として岩津館、岡崎館、安祥館攻め落としに成功、これで味方は勢いを増し勝ち戦の道筋をつくったとして、岩津・岡崎・安祥を賜ったので、岡崎を松平光重、安祥を松平親忠、岩津を松平親長にそれぞれ分与した

親忠は父の下知に従い早々に、一族手勢を引き連れ住みなれた大樹寺の鴨田館かもたのたちをはらって、碧海郡安祥が原（名鉄南安城駅南の社口堂の周辺）東端の安祥館へ移った。

安祥の館は、本丸・二ノ丸は延べ千三百坪ほどの小さな平山城で、御館・穀物倉庫・見張櫓ともに木造の簡素な建屋が並び、四周は一面蘆の群生に蔽われた湖沼のまっただ中であつた。多少の雨でもの周りの深田は水を張る。まさに湖上の守り城である。

現代人の感覚でとらえると、なぜこんな辺鄙な処に城があるのか理解しにくいところだが、室町期の城塞は、奇襲・夜襲に堪え得る防衛の地勢条件が第一に求められ、攻勢は二の次だった。

安祥館には常時三十人ほどの守備兵が交代で詰めていた。守備兵は大体が領の百姓と譜代衆が掛け持ちで、農繁期の勤め番はやり繰りが困難を極めたが、代理番を遣わすのが常であった。雨期の館は湖沼の孤島となるので、登城には田舟が利用される。要塞とはいえ難儀なことであった。

安祥館の親忠は、父信光に勝るとも劣らぬ軍事指揮の器量持ちであった。しかし、賢明かつ熟慮の人で、意味のない諍いを好まなかった。

明応二年（一四九三）十月、賀茂郡衣で高橋庄を支配する幕府奉公衆中条出羽守秀章率いる上野館主阿倍孫左衛門・寺部館主鈴木重勝・伊保館主三宅家次ら西三河の国人衆三千の兵が大樹寺近くの井田野に迫らんとしたときも、

「所詮、三河者は三河者よ。三河者が何をもって京の内訌に身を寄せるか。なぜ三河のために働かぬのだ」と嘆くほどだった。

中条出羽守の狙いは三河守護の地位であった。親忠もそれは分かっていたが、あえて翻意を促す遣いを発てた。しかし、遣いの者は戻らなかった。

親忠はこの時点で、戦闘の腹を固めた

三河（明応の井田野合戦）は、將軍足利義材が河内の畠山義豊討伐に出陣した留守中に細川政元が香厳院清晃擁立を謀ったことが元で起こった幕府内の政変である。三河にとっては貰い火のようなものだった。

義材は細川政元を許すまじと政元の庶家糾合作戦を謀った。その狙いが一族の総帥格三河守護細川成之の勧誘にあったことは明らかであった。政元は直ちに呢懇の出羽守に成之討伐を命じたので、成之は安祥館の親忠に援護の急使を遣わした。

「恐れ多きことながらわが松平一族、古きより伊勢様の被官として三河一円の静謐につとめてまいりました。この儀伊勢様のお声を伺わねばなりませんゆえ、しばしご猶予賜りたく」と、親忠は丁重に、即答を避けた。

間もなくして伊勢氏から成之援護の下達が入り、出陣を決めているが、要は、伊勢氏被官を成之側に認識させるのが狙いだった。

中条出羽守を主力とする細川政元派の兵三千に対し、細川成之を守る松平親忠側の兵は岩津、岡崎、安祥の松平宗家・庶家連合五百と、援軍に参じた伊勢貞宗の手勢百五十である。数では勝ち目が無い。しかし、兵の指揮をとる親忠の頭の中には地の利を生かせば十分勝てる確信があった。

親忠は最初、敵からよく見渡せる平場に魚鱗の陣形をとった。

敵が兵力にものをいわせて攻勢に出るのを読み取った上で、予め指示しておいた通り味方の兵を数珠状の二列隊に組ませ、あたかも敗走するように見せかけながら大樹寺から井田

野の段丘に後退させ、極力懷を深く、横隊一段構の陣形で敵を呼び込んだ。

すると案の定、敵はそこが深田であるとも知らず闇雲にぐいぐい攻め込めてきた。親忠の思惑通り敵は深田に足を取られ身動きできない状態となった。

親忠の軍は刀を汚さずして、大軍を退けたのである。

この勝利で親忠の求心力は一氣に加勢され、松平氏の地位は一躍三河での中心的国人領主として確乎とした基盤を築くにいった。

初代親氏から信光・親忠時代までが松平氏草創期とするならば、次の長親からの時代は飛躍の時代と見ることもできる。

長親が家督を相続したのは明応四年（一四九五）四十歳のころだといわれ、その後も親忠は実権を掌握して家政を主導し、文亀元年（一五〇一）死の寸前には長親を無理やり家督を引きずりろして隠居させ、寵愛の孫信忠を家督に就かせるという後味の悪い人事を残して世を去った。長親を隠居させた理由は「戦好きの分別なき覇権者」、歴代領袖の理念に悖る相応しからざる人物であったといわれる。

長親はいわれるがまま道閤を名のって大樹寺庵に隠居した。

家中は騒然となり、松平一門衆、譜代衆が病床の親忠に撤回を求めて詰め寄る場面も見られたが、結局、親忠は何も応えず禍根を残したままだった。長親はこの人事が何を齎すものかおおよそ見当は付いていた。そのときになれば事はすべて解決すると確信していた。庵を訪ねてくる譜代衆の憤りを鎮めながら、

「皆の長親を思う存念はありがたく思うが、人事は主の特権である。もちろん、長親にも思うものがあるが、真摯に従うておるのだ。一族一家とは、人の垣、これを壊すも守るもわれらの思い一つでいかようにもなる。ここが考えどころだ。皆も承知のとおり、ここにいたる松平家の道のりは、毎日が風雪にさらされ、肩寄せ合いながら今日の基盤を築いてまいった。この掛け替えのない資産をむやみに弄んでは先達者に申し開きがたたぬ。ここはしばらく肅々と、皆で家政に励むことだ。きっと、あらたな日が射してくるかもしれぬ。われらはそれを待つのだ。」と諭した。

庵での静穏な日々をおくる長親の大きなふところに触れ家中の者は皆、力をもらって帰ってくる。騒ぎは直ぐに収まった。

人心収攬に欠ける信忠の家政は不人気であった。

肝心の外交・軍事面は道閤と老臣に任せ、もっぱら信忠は自分を慕う弟の松井信定との友好に明け暮れた。謂わば二頭立ての政務だった。

当然、指導力・人望に欠ける信忠には人が付かず、一族間・譜代衆・国衆領主との政事・儀式の場にも足が遠のくようになった。

道閤は信忠を訪ね、事の真意を質した。

「どこの家にも言うに言われぬ柵はあるものだ。それを正し、運氣を盛り立てていくのが主の知恵であり、器量だ。もしその器量が及ばぬなら年寄りの知恵を貸してもらうことだ。家中の者が互いにそれぞれの知恵を持ち寄ってこそ、誼が生まれ、氣心が伝わりあうというもの、

こうした一見ばかばかしいことが家中の淀みを取り払って運気を呼び寄せることにもなる。それが家政というものだ。其方は今、この道理をなおざりにしている。何故、人を疎んじ遠ざけるのか？人が寄らぬのであれば寄せればよいではないか。酒宴でも遊山でもよい、主の催事とあれば誰も拒めまい。何事も為してみろ、その心がけが肝心じゃ」

そういう含めた後、さらに、

「松平宗家の主だからといって其方だけが重荷を背負っているとは思ってまいな。一族・一門・譜代衆・地侍・国衆・百姓すべて家族をも含め、皆それぞれが、思い思いの重荷と大義を背負って、宗家に力を添えてくれていることを忘れまいぞ。主従の絆とは、主が背負っているその難儀と、家中たちの難儀の行き交いから生まれる慈愛のころ。もし其方が、宗家の重荷と大義に堪えられぬというのであれば、それはとんでもない思い違いじゃ。これだけは申し置く。桜井の信定と懇ろになるのも結構。ただし、いま信定がやっていることをよく考えた上で交誼せよ。程々に、過ぎぬように。先ずは家中の者たちとも厚い心で語り合える誼をつくれ。それが先じゃ。よいな。言いいいたぞ」

道閤は、穏やかに言いきかせた。

道閤が心配するのは、管領御三家斯波・細川・畠山家間の権力抗争による急激な幕府の衰弱である。鎌倉公方足利氏の本家に対する反逆、同族地縁の諸国守護らの離反・独立の気配、末端地侍らの反荘園領主・反守護の動きがそれだ。こうした動向に信忠はあまりにも無頓着だった。

父の説諭を信忠は無碍にした。

信忠は一存で桜井信定の娘を室に迎える約束を交わしたのである。

信定は唯我独尊、政務評定を軽んじ、勝手気ままにふるまう危険人物として宗家はもとより一門・一族・譜代衆からも疎遠され孤立状態にある厄介者である。やることなすこと須らく軌条を脱し、その矛先は宗家へ向けている。

信定は、織田信秀の盟友刈谷館の水野忠政に娘を室に嫁がせ、自らが織田信秀の妹を室に迎えたかと思えば今度は、こともあろうか娘を織田信秀の実弟信光の室に送り込むなど、対宗家へ向けた剥きだしの行動が止まらない。それでも飽き足らず宗家に距離を置く諸川の水野信元、大給松平親乗、大草松平昌安らとも昵懇に誼を深めて安祥包囲網を強めるなど狂気の沙汰は止まる気配がない。信忠も信定の行き過ぎた言動については糾されるべきものがあると思っていた。しかし、目指すものが三河の版図平定であるならば当面、織田氏との休戦は不可欠であり、織田・水野抱え込み戦略は必ずしも突出したものではない、と考えていた。

堪りかねた譜代長老の酒井将監が、主に接見した。

信忠はこころもち弱々しく見えた。

「此のたびのこと、腹立たしく思うておるのであろう」

「物事には越えてはならぬ限りというものがございます」

「桜井から嫁を迎えることが、際限を越えていると申すのか？」

「そうは申しておりませぬ。桜井殿のお振舞いを申しているのでございます」

「織田（信秀）殿との縁結びのことだな」

「水野（信元）殿、大草（松平昌安）殿、大給（松平親乗）殿と、桜井殿の縁結びの先は皆、宗家との誼が行き届かぬところばかりにございます」

「それは将監の推量であろう」

「確かな間触（ききふれ）にございます」

「桜井の破天荒ぶりは昨日今日に始まったものではない。それを安祥の者は目の敵のように弟を見る。織田も水野も、いま其方が申した者たちとの誼も、西三河中部領の静謐を慮っての知恵なのだ」

「それがどれほど、われらの足枷（あしかばね）となっているか、殿にはお見定めいただけませぬか」

「わたしは、弟を日の出るところへ出してやりたいのだ」

「桜井殿に牽かれて、宗家諸とも織田へ下る事態になりますぞ」

「そうは、ならぬ」

「拙者の申し上げることはこれまででございます。将監ならずと、宗家・一門・家中挙って存念を申し上げねばならぬ事態となりましょう」

「儼を裁くのか？」

「律によって糺すのは、当然のことでございます」

接見は単なる手順を踏むためのものだった。

すでに道閥のもとで一門・家老・譜代衆の評定がもたれ、〈信忠隠居〉の連判状がつくられ

た後であった。

三日の後、信忠は大浜名称寺に隠居となった。信忠の失脚で、信定の陰謀はすべて頓挫した。

大永三年十一月、家督は十三歳の若い清康が継ぐことになった。

清康は小柄で色白な童顔だった。

家中での前評判は〈ひ弱で頼りなげな若様〉と受けとめられていたが、祖父道閥の威光もあつてか譜代衆が全面的に協力したので、徐々に威信を身につけ家中の連体・協和を盛り返していった。

ある日、道閥が安祥館を訪ね、

「登館に随分と難儀いたしました。この御館も十分働いてくれた。そろそろ何処ぞ新居を見つけてはいかがかな」

ぽつり、といった。

「清康も斯様に思うておりました」

「どのあたりがよいかの？」

「明大寺では？」

「彈正左衛門督はなかなかのしたたか者であるぞ」

「山中館から攻めまする」

「なるほど、なかなかいい知恵じゃ」

安祥館は西に偏りすぎているうえ、根城も手薄である。これからの戦局は対隣国へ向けた軍事的な地の利、睨みが重要となる。その点明大寺館は西を遮断する矢作川・菅生川（乙川）があり、西からの侵攻を止める国衆が要所に点在している。何より東西主幹街道は西の織田、東の今川の動きを睥睨監視するにも好適で、さらに岡崎から信濃への中継点足助から先の中馬道は信濃には欠かすことができない塩補給路であり、両国間の軍事解決の場面では硬軟使い分けが利く政事切り札の道を擁することになる。清康は毎日頭にあるのは、三河版図後の戦略だった。

道関は頼もしげに、いくども頷いた。

清康は先ず、山中館・明大寺館の俯瞰図を作らせた。この図面を毎日の評議に集まる年寄衆の前に広げ、松平昌安の器量・人物像、線歴、教養、縁戚関係を聞きとる作業を済ませた。その一方で、大久保忠茂を中心に戦上手の者たちと実戦を想定した一の手、二の手、三の手まで戦術が決められた。だが、忠茂のいう敵兵五十に対する味方五十の傭兵については異をとえ、八十にするよう命じた。慎重細微な清康の一面がうかがえた。

また出陣の作法も一風変わっていた。陣触れもなければ陣立て式もないというもので、一人が然るべく告知された日時・場所に集結するといった具合だ。

大永四年（一五二四）五月。

遠雷が鳴り響く夕闇の中を羽栗から舞木へ急ぐ四人の百姓があった。

清康、本多重正、やや遅れて大久保忠俊と鳥居忠吉である。真向こうの山間に山中館の屋根

が見える。集結の陣場はその麓の鶴ノ澤祠である。

清康が着いたときはすでに全員がそろい、侍大将の大久保忠茂が落ち着きなく、空を見上げてはあたりを歩きまわっている。

暮れ六つ、雷鳴とともに大風となり、地べたを叩きつけるような雨となった。

忠茂は、出陣を告げた。

俄か攻めは図に当たった。

山中館では夕餉の酒盛りが始まるところだった。

清康は先頭に立って戦った。鏑迫り合いにおいても物怖じしなかった。敵と刃を交えるさ中にも武道を尊び退く相手は深追いしなかった。このへんの変幻自在な戦闘ぶりに、側人に付いた本多重正も大久保忠俊も満足気だった。すでに清康には王者の風格が備わっていた。

戦闘は一瞬にして終わった。

平伏してかきこまる昌安以下、山田彦六、成瀬大蔵、佐野弘昭、今村孫次郎らに、

「清康の志は三河の平定でござる。これに立ちはだかる者は何人といえども容赦はせぬ。爾後、このこと肝に銘じられよ。追って沙汰致す故しばらくは謹慎いたされ。なお、明大寺の御館は貰いうける」

と厳しく言いわたした。

清康の戦闘ぶりは口伝てに家中・巷間へと広がり、安祥館に足が向かなかった西の国衆、隠居した岩津譜代衆までが御館に上ってくるようになり、近在の地侍らも土地の物産を手土産に

訪ねてくるようになった。

道関は、清康の後見役に本多重正を付けた。手堅い行政手腕を見込んでのことだった。

重正は、額田郡大平村東南部と碧海郡上和田の十二脇在家と矢作川べりに流作場を拠する脇百姓らを束ね、おもに松平一門主家・庶家・譜代衆・国衆間の諸事調整役を務める松平家の有力譜代衆であった。

清康は明大寺館の改修を急がせた。

重正は、主の下知を受け、年寄衆阿部定吉、大久保忠俊、内藤義清、石川清兼らに参集を呼び掛けた。案件は「西郷信貞の扱いと明大寺館の改修工事の件」について忌憚のない考えを述べてもらうことだった。

松平昌安については大草（幸田町）に隠居させ、娘を清康の室に迎えることで穏便に処した。明大寺館の補修工事は五か月を要した。

改修なったところで清康は館の呼称を岡崎城と改めた。

清康は岡崎入城直後、参集した一門・有力譜代・国衆らを前に、

「未だ出仕をせざる一門又は国侍共之方え仰遣されけるは、信忠隠居有て、我に代を譲せ給ふに付、纔五百二百之普代之者計にて、あたりまわりを切付て、大方一門も出仕をする。其外之者共も出仕をすれ共、其方などは、一円に構も無有事は不心得。早々出仕をせよ。然共、存分次第。此返事によって、押懸て、存分によって踏みつぶすべし」

と、家中に強く恭順を求めた。

清康にすれば統治能力の瑕欠で主の座を降りざるを得なかった父信忠の失敗を目の当たりに見ているだけに二度とその轍を踏むまいとする思いがあったのだろう。

重正も時を同じくして上和田村糟目の居を、大平村東大森へ移している。

登城の利便性もあるが、城勤めはそう頻繁なものではなく戦時でなければ月四回ぐらいの登城だった。

やはり、矢作川の氾濫・洪水からの撤退だった可能性が強い。重正の屋敷がある上和田村糟目辺りは、流路が大きく湾曲する丁度その外側に位置し濁流の勢いを受けやすいところで、川欠被害の多発地区だった。雨が長引くと居宅周辺は水嵩を増す濁流を目前に連日連夜その中で過ごさねばならない。その点大平村はなだらかな段丘地で雑樹林も多く、比較的地盤も堅固なので居を構える条件は整っていた。災害の後片付けに費やす徒労がなくなる分、城勤めに精励できると考えてもおかしくはない。上和田村は川越の水に悩まされた厄介な土地柄だったことが見えてくる。

八歳の誕生

享祿二年（一五二九）十一月、本多次郎大夫重正に二人目の男子が授かった。母子ともに元気で、この朗報に主君の松平清康は吾がことのように喜んだ。

「名は決めたか？」

清康が予告なしに重正の手狭な執務詰所を訪ねた。執務所とはいっても米倉番屋の中二階隅に机が置かれてあるだけの板間で、日中でも薄暗い。重正は年次の残務整理に追われ下城の刻も忘れていた。

「お出迎えも致しませず、ご無礼仕りました」

「唐六典には、八つ縁起を持つ天子のことが書かれてある。八歳ではどうじゃ」

と決めつける口調でいった。おそらく、清康のいう八つ縁起とは「八寶」の思い違いで、実際は神寶・受命寶・皇帝行寶・皇帝之寶・皇帝信寶・天子行寶・天子之寶・天子信寶のことではないか。それにしても物を引きだす機智というのか当意即妙は、いかにも清康の性格が表れている。

重正は主から貰った「八歳」の命名を早く妻の瀬々に伝えようと、暮れなずむ菊田の畦を急

いでいた。

式台をまたぐなり、

「殿がお名をくだされた。倅の名は八歳だ」

「はちぞう……、いい名前ですこと」

瀬々は素直に喜んだ。

「丈夫（ますらお）に育てよとの仰せであった」

「ありがたいことでございます」

文献には三河国額田郡大平の生まれ、あるいは碧海郡上和田の生まれとするのもあって一概にはいえないが、作左衛門重次生誕地碑の立つ犬頭神社（岡崎市宮地町郷西）は、元は上和田村糟目にあったとする口碑もあり、また、重正が安祥館に所属していたことなどから推量すると、上和田村生まれの方が理にかなっている。

このいずれかの生まれであったことは間違いない。長男の於沙彌（重富）が病弱であったこともあり、生まれてくる子には期待が大きかった。瀬々の祈願が天にとどいたのか、産声の子は丸顔の隆々とたくましい男子だった。後の作左衛門重次である。

父の次郎大夫重正は安祥譜代で、清康の懐刀とまでいわれるほど信任が厚く、また、それによく応える賢明な吏僚だった。

重正の任務は大半が松平一族庶家と家中間に起こるさまざまな諍い・いざこざなど諸事問注と、その調整解決であった。大夫の位名から大膳職、修理職、京職の役回りかと誤解

されがちだが、そうではない。処理案件には言うに云われぬ難儀な問題も多いが黙々とこなしてきた。それもこれも重正の人徳が解決に導くのである。

松平家臣団の成立ちはじつに複雑である。

家臣団の主格をなす譜代衆ふだいしゅうの区分においても、祖の太郎左衛門尉親元たろうざえもんのかみもとから三代信光までに仕えた従者を岩津譜代、四代親忠から七代清康までの臣を安祥譜代、清康が山中館の西郷信貞を破った際松平氏に恭順を誓った家臣を山中譜代、それ以降の家臣を岡崎譜代といった具合に形成過程が入り組んでいるし、さらに、松平一族内の家風の違い、家政力の大小格差、支配在家の立地条件、外交・誼の流儀などの違いなどさまざまな境遇が絡んでくると在らぬ風聞・疑心暗鬼が独り歩きをし、それがもとで軋轢あつれき・我執がしゅう・いがみ合いに発展するケースも少ないのである。

それだけに重正が手掛ける案件は公正さが求められる。場合によっては宗家・主であっても、厳しく諫言することも起こりうる。肝要は予後の補佐・補填だ。これが欠かせない。

清康は松平宗家の家督に就いて早六年になっていた。

家政手堅く、家中の士気も隆々としている。しかし、不安材料がないわけではない。桜井信定の陰湿な挙動である。信定は西三河国境の静謐を理由に緒川館水野忠政と誼を深め、さらに尾張織田信秀との縁談も噂されている。一刻も早く東三河の平定を急ぎたい清康にとって西との衝突は時期的に不具合要素であった。信定の心底には織田の抑止役としての存在感を一門諸

氏に示す又とない材料と踏んだのかも知れない。火種をやることでキャスティングボードを握ろうとしているのは明らかだった。尾張から移住してきた新参者に目をつけるところなどはいかにも信定らしい小賢しさだ。

清康はあえてそれを黙殺した。守護代織田大和守達勝と清洲三奉行職信秀の間が思わしくない情報を掴んだからだ。すべからず軍事でことを解決しようとする信秀と、守護・守護代の統治権下で行動することを求める達勝の政事手法の違いが抜き差しならぬ状態になっているというのだ。

清康は、《今が好機》と見た。

おりおり足助の鈴木忠親、川路の設楽貞重、嵩山の西郷信員、作手の奥平監物、長篠の菅沼三郎左衛門、田峰の菅沼定継、正岡の牧野成敏ら東三河国人衆と交わしてきた親書を元に、標的となる吉田・牛久保・田原館攻めの機略を構想した。

さいわい東三河に睨みを利かせた今川氏親は他界し、家督の氏輝は病弱で精彩がない。国人衆の掌握力もずいぶん低下している、と清康は分析した。

だが陣営も盤石ではない。依然、桜井信定の行動には連帯を削ぐ突飛が多い。

東三河遠征中の間、岡崎城守備と留守を預かる酒井親忠、平岩親重、本多重正も思いは清康と同じで、万全な手立てを講じておく必要があった。

「信定様のお心はいがんだる。まっと平らにならんと」

酒井親忠が直截に指摘に、親重も重正も頷いた。

「事あるたびに織田だ水野だと誼をご自慢なさるが、こっすい水野の手管であろうが。懐柔されていてもお気づきでない」

「みっともない限りじゃ」

「ふんごむことが心配じゃ」

「えめぞに嵌まらんよう、重正殿もお方のお心鎮めにお通いだけな」

「骨のおしよれることだん」

「戦の要を担うていただいては如何かと」

重正が話の流れを本論に戻すべくボツリといった。

と座が静まって、

「なるほど……」

と大久保忠俊が腕を組みながら頷いた。そして最後は、

「それはいい考えじゃ」

と親忠が締めくくった。

具体的な対応策というより信定に対する感情論が多く、地言葉まる出して本音のところが語られた点では収穫だった。

清康は長老の意を斟酌し、東三河遠征では信定を先衆七手頭に当てることを固めた。遇することで今後どう変わるのか変わらぬのか、それを試したかったのである。

もちろん信定は快諾した。

五月某日夜半。

総大将松平清康は守備兵三百を残し、岡崎を発った。

太郎左衛門尉親信、桜井信定・清定、大草昌久、長沢一忠、形原親忠、能見重親、福金親次、三木信孝、竹谷清善、深溝忠定、滝脇乗清、藤井俊長、東条義春、大給親乗、五井信長ら一門勢、そして石川清兼、大岡忠勝、大久保忠茂、忠俊、鳥居忠吉、本多正忠、本多信重、成瀬国重、阿部定吉、内藤義清、鈴木重直、天野忠親ら譜代・国衆はそれぞれ別動で、集結本陣となる宝飯郡赤坂音羽へ向かった。

闇が溶けかかる暁七つ時分、出立時わずか三百だった清康の本隊も、明六つのころには桜井・福金・大給・滝脇・藤井・三木の一門衆が続々と合流し、太く長い列をつくっていた。

土を踏む馬蹄と兵の足音が交互に静まった山合いに響いた。

しばらくは暗い雑林の中を突き進み道切注連が吊るされてある村境の脇道を通り過ぎる。

と突如、雲海に蔽われた京ヶ峰がぬっとあわれた。

通り過ぎようとすると身が引き込まれそう不思議な吸引を擁した深山だった。

その厳かな神秘に「うおう」と感応する者もいた。

それから麓の暗い杉林の道を小半時は歩いたろうか、杉林をくぐりぬけてさらに行くと長沢・五井・竹谷・東条・深溝・大草ら一門衆が団を組み、本隊を出迎えた。互いが入り乱れるようにエールの交歓が行われた。

そこから先は音羽川沿いの緩やかな坂道だった。

やがて、赤坂本陣の目印とされる宮路山と五井山が近づいてくると今度は、勝鬨のような歓声とどよめきが上がった。

想定された敵方根城からの交戦もなく無事目的地にたどり着いたことへの歓声だった。

その時だった、最前方の隊を行く馬上から、

「静まれ！静まれ！」の叱呵が放たれた。

桜井信定だった。

これに続く総下知の内藤義晴が呼応して、

「ここは敵地であるぞ。無闇に歓声するでない！」

と訓告した。

赤坂に集結した兵は総勢千百だった。

先ず、先衆七手は松平信定を組頭に松平一門と、二手之先衆七手は組頭の石川清兼・大久保忠茂・大久保忠俊・本多正忠・本多信重・成瀬国重・鈴木重直、脇備三手鳥居忠吉・天野忠親・阿部定吉の隊伍が整えられた。それから各人腹ごしらえが始まり、武装具の点検などが行われ、暮七つ過ぎ先衆七手が国府へ先発、続いて二手之先衆七手が御油へ向かった。

残る総大将清康以下、総下知内藤義晴、執事・奏達大岡忠勝ら幕僚は赤坂で一夜を明かして、翌朝、前線本陣の小坂井へ向かった。御油の松林をくぐりぬけ、山間の處ところに拵えられた小さな棚田の朝陽を浴びながら国府を過ぎ、新宮山の麓の丘陵道を上り下りする時分だった、空の色が一変した。煤のような黒煙があたり一面に浮遊している。清康は「また拔駆けをしおっ

たな」と、得意気に駆け回る信定の紅潮した顔を思い浮かべていた。

小坂井本陣に着くなり、下地集落に火つけたことが先衆の使者から報告された。

案の定だった。

下地村は豊川の堆積土砂でつくられた瘤地で、その先端部の対岸が吉田館だ。信定ならずとも当然の仕掛けである。戦上手の信定らしい挑発である。

やおら、「攻城戦のつけ入り」と見た敵將の牧野信成は激しい口調で三成・信高兄弟に迎撃を指示した。

この場面を『三河物語』では、「小国をふたりでもってもしようがない。きょう、どちらがほんものかを決める合戦をしよう。東三河を清康がとるか、西三河をわがものにするか、ほんものを決める合戦だ」と描写しているのだが、この後女子供を館に残し、百人余の兵を引き連れ船で豊川をわたっているのを見ると、ずいぶん投げ遣りで短絡的な采配である。通常であれば盟友田原館の戸田憲光、仁連木館の戸田政光、牛久保館の牧野成勝、そして何より駿河の今川氏輝に援軍の急使を発し、女子供を御館から逃散させた上で、籠城戦に持ち込むのがセオリーだろう。これほど信成の平常心を腑抜けにさせてしまったものは何だったのか。先ず、松平軍の侵攻事体があまりにも早すぎたため、臨戦態勢に入っていなかったこと。御津茂松・竹本・牛久保の根城が普請途中だったこと。後援者であるべき今川氏輝からの誼が疎遠化していること。盟友であったはずの仁連木の戸田政光・宇利の熊谷実長・上ノ郷の鶴殿長存・野田の菅沼定盈・佐脇・作手・荻の奥平監物らが城籠りに徹し「清康侵攻」の報がどこからも届か

なかったこと、などが挙げられる。

しかし、戦国にあって裏切り・鞍替えは当たり前のことである。それが想定できなかった牧野信成の将としての資質は疑うまでもない。

百の兵で千余を相手では、結果は決まっている。

戦は晝前まで小競り合いが続いたが、暮八つ牧野信成、兄三成、弟信高ともども討死したのを境に戦況は一方的となり、下地の土手に追い詰められた牧野側の残兵は諸共、屍を重ねた。桜井信定の働きぶりは見事だった。

勢いをかった先衆七手は下地の農家の田舟を見つけ出し、対岸の吉田館に乗り込んだ。すでに御館の中は人の気配がなかった。信定は「城取り」を伝える狼煙を上げた。これを見た彼処の兵の間から一斉に勝鬨の歓呼が上がった。暮六つ、清康は川を渡り、吉田館へ入った。

先ず清康は、信定を見つけると傍に歩み寄り両の手を強く握って、

「存分の働き、允^{まこと}にお見事」

と大きな声で謝意を述べた。さしもの信定も感激で体を震わせ、総大将の手を握りかえた。直ぐに戸田憲光攻めの軍議が持たれた。

会議の間にも作手、二連木、西ノ郡、西郷、田峰、野田、長篠、牛久保、設楽から服属の親書が届けられ、応接には内藤義晴が当たった。

「田原まで約五里。ここは兵を休めて、明朝の出立と致しましては？」

「一夜、憲光に考える時を与えるのが宜しいかと」

「そう、致そう」

「大凡の戦況は逃げた女御衆から聞き及んでおりましょう」

「憲光は聡明な男と聞く。愚鈍な牧野兄弟のような戦はすまい」

「隣国の覇権を思えば、二百の兵は得がたき力。殺しとうはない」

結局「明日早々、攻城戦略で軍勢を鼓舞しつつ戸田方の出方を待ち、頃合いを見て使者を遣わす」戦法をとることとした。

思惑どおり田原の戸田憲光は、松平軍が館前に到着と同時に城門を開き、門前で一人深く平伏する武者がいた。戸田憲光であった。清康は馬を降り、その面前に進んで、

「戸田憲光殿とお見受けいたす。岡崎の清康でござる。このとおり戸田殿との誼を求めて遙々訪ねて参ったが、無駄ではなかったようだ。隣国を見てもお分かりと存ずるが、武田、今川、斯波、織田、上杉殿は皆、吾ら三河の地下国人衆とは違い守護上がりの面々、処世も国の形・思い入れが異なります。三河が面々の餌食とならぬためには、三河が一つになることです。四方に目が行き届く態勢を早くつくらねばならぬのです。内々の戦は金輪際終わらせねばなりません」

「ご高説、ありがたく承りましてございます」

「末長く、誼を賜りたい」

「憲光、肝に銘じて御誓いを申し上げます」

この遠征で東三河はすべて平定された。

八蔵が生まれた享祿二年という年間を歴史年表で見ると、

一月・細川高國、伊勢の北畠晴具に京都回復の協力を請う

二月・大内義隆、被官人の奢侈を禁ず

五月・松平清康、吉田館牧野信成・田原館戸田弾正忠を攻め落とす。

五月・川路館設楽貞重・嵩山月谷館西郷正員・作手館奥平監物・長篠館菅沼新九郎・田峰館

菅沼定継ら戦わずして恭順を誓う。

八月・細川晴元の被官三好元長、阿波に帰る

八月・御成敗式目享祿版刊行される

九月・細川高國、越前を経て出雲の尼子経久を説き、さらに備前の浦上村宗を頼る

九月・清康、三河・尾張・美濃三國境の品野館、小牧の岩崎館を攻略す

十月・道闕、大樹寺末寺春林寺に下地を寄進する

・叡山僧徒、京都中の日蓮宗徒を皆殺しにする

特筆すべきは、わずかに四、五百の手勢しか持たなかった清康がこの短期間に五千近い兵が動員できる大名に躍進した点だ。

内の固めを見極めつつ外の攻め時を図る攻勢と、和の蘊蓄^{うんちく}、天性の機略^{きりやく}、時流の読みが絶妙に清康の人使いと巧く絡み合っているように思える。

一国の統一が目に見え始め詰め段階だけに、味方の士気をそぐ内輪揉め^{うちわめ}だけに厳しく処し常に万全を求めた。これが清康スタイルだ。

その思いは家中にも行きわたっていた。

しかし「画龍点睛を欠く」の譬もある。

目的意識を一つにすることが肝要であった。

一番懼れるのは、一瞬の隙である。隙を家中が互いに補填しあう態勢がとれ、それを持続することが不可欠だった。

清康は逸る己を鎮め、家中の一丸一体を求めるのも、將軍家、管領家が齎^{けんけつ}している権議^{けんぎ}の奔玩^{はん}がある。どれほど国政を乱し、国体を疲弊ならしめたか。戒めは重く、忍耐は辛いのである。

主の大義が、家中の大義として浸透することを、清康は強く求めた。

清康の口癖は「農業を知らぬ公達政治から、田畑を耕し国財の資を産む道理を熟知する地下請け農業者が政道に就く時がきている」だった。〈松平一族は伊勢氏の庇護下で特段の進展を見、わずらわしい守護傘下の利権構造に浸ることなく楚々と目指す道を歩むことができた。払い除けようにも払い除けることができない重石に押し潰されかかったことも数えきれない。だが、その打ちひしがれた屈辱と忍耐が、今を残してくれている。残された遺産に骨を埋め、肉を付け、精神をそぐことでどんな形の松平家になり替わるものか〉清康はそれを確かめたいと思ったのである。

次は、織田信秀との対峙である。

これまで三河を出てたかった戦はなかった。
国境の向こうにある未知の世界が、霞の中に揺れ動いていた。
八歳はこんな激動のさ中に生まれてきた。

鳥居忠吉の家譜

鳥居氏の家譜をさかのぼると〈鳥居法眼重氏〉なる人物にたどりつく。
諱の法眼からも僧籍にあった人のようだ。

踏査と史料をつけあわせながら取材を進め飛び込んでくるのは、

〈先祖は熊野鈴木氏で元来は熊野神社の神官をつとめる家系〉

〈紀伊国熊野権現にかかわる神職をつとめ源頼朝から散所の地頭職を授与〉

〈鳥居禪尼は源平ノ乱後甥にあたる源頼朝から紀伊国佐野庄・湯橋庄屋・但馬国多々良岐庄などの地頭に任命された幕府御家人〉

〈承久の乱後、平氏を祖とする鳥居中務が紀州熊野を追われ矢作庄・渡に城を築いて居住〉

〈忠氏は承久ノ乱で幕府に背き京方に味方したため紀州熊野を追放され三河国矢作庄・渡里に

来住〉

〈以来忠氏は渡里・傳内忠氏と名を改め矢作川沿いに渡城を築城〉

〈忠景は渡利新左衛門と称した〉

〈南北朝戦では亘新右衛門を名のって新田義貞に随従〉

〈鳥居氏は三河国矢作庄渡里に住した土豪で早くから松平氏に仕えたいわゆる安祥譜代〉といった後世の人が口碑・伝承・戦記物・城址碑・家譜碑・由緒書を文章化したものが多いが、これらは皆われわれ歴史研究者の間では二次史料といわれるものだ。

これを史料とみるか否かは研究者の胸三寸ということになる。その点自治体編纂の市町村史は文書・一次史料をもとに精査・吟味して編集されている。ただし、これすらも絶対のものではないことは承知しておかなければならない。

歴史の真実を見極める方法としては、当時を生きた人、当事者の側近くに仕えた人の手になる日記・忘備録・書簡類の精査に限る。

ところがこうした一次史料といわれる一等文書は終始然るべき一定の場所に保蔵されているとは限らないし、これまでもそうであつたように時の権力者の一存で不都合な記述が書きかえられたり、模写・偽作されたりすることも珍しくないし、焼却されてしまうこともあれば、戦動乱にまぎれ人から人へ転々と盪回しにされる間に纏まった資料の一部が不揃いなものになってしまつたり、火災で焼失したりしてしまうことも多く、残っていたとしても部分的かつ接ぎはりだらけのものになっていたりする。穿った史料はそう簡単に出てくるものではないのである。

この満たされぬ苛立ち戸惑いが、じつは未知の歷程へ引きずりこむ起爆源となるのだ。言問の旅は、ここから始まる。

鳥居氏の出自が分かるのは安祥譜代忠吉の代からである。

安祥譜代とは松平親忠・長親（道閔）・信忠・清康の主城安祥館に出仕した臣の呼称で、後の家康時代の中核をなす武將らを多く輩出している。忠吉もその一人だ。

忠吉は信忠に出仕しているが、事実上の主は道閔で、政事も道閔を軸に動いていた。結局、信忠は若くして隠居を余儀なくされている。

大久保彦左衛門原著『三河物語』には、……慈悲の心もなく、ましてお情け深い事績などなにひとつなかった。ご政務の方も手腕なく、ご家来の人びとにおことばをかけるということもなかった。ご家来の人びともまた民百姓も恐れおのいて、心よせる者となかった（中略）と、人心収攬・人望に欠けていた経緯が描かれているが、実際にこの通りであったか否かは別としても、罷り間違えれば政変ともなりかねない場面を静穏に手堅く御し、待ちに待った清康に家督を承継させたのは道閔だった。

信忠の不徳を二十二年間背負いつつも孫清康の成長を待ち、松平氏中興の礎を築いた道閔の功績は骨頂といふべきだろう。

このころの忠吉は、矢作川河岸の渡里で船宿と渡船業を営みながら、平事であれば月に四回安祥が原の御館に登城して家中の庶事世話役の任務をこなしていた。執務部屋は米蔵番屋にあり同じ屋根の下には問注案件処理方の本多重正が詰めていて、互いに案件を啓発しあう昵懇の仲であつた。

重正の屋敷は上和田村槽目なので、登城には必ず矢作渡しの世話になる。執務中に思わぬ大

雨があると船留めとなるので、そんなときは鳥居家の宿に世話になる。だが、清康の三河平定が進み居城を岡崎に移してからは共に役も重くなつて繁多を極めたため、逆に忠吉が本多家の世話になることが多くなり、両家はいつそう親密度を深めていった。

このあたりについては別項で詳しく述べたい。

忠吉・重正の友^{ゆうぼく}穆は元龜三年（一五七二）まで続く。そして二人は申し合わせたように同三月に他界している。

このように忠吉についての動静はある程度把握できるのだが、もんだいは忠吉以前である。その不明点を解くキーワードは三つあるように思う。

〈鳥居禪尼〉、〈熊野別当〉、〈御師〉、だ。

『寛政譜』は鳥居氏の始祖について、〈鳥居氏は代々熊野神社の神職の家系であり熊野山に一の鳥居を建てたことから鳥居と称するようになった〉と、記し、その初代を、〈源平ノ乱における功勞で源頼朝から地頭職を与えられていた鳥居禪尼だったが、その莊を子の忠氏^{ただうじ}に横領され、忠氏が承久ノ乱で京方に加勢したため熊野を追われ三河国矢作莊に來住した〉と、ある。

『系図纂要』の平氏に分類されている華族類別譜系図でみると、実方—泰—○—定成—泰救—快真—長快—長範—行範—忠氏

『姓氏類別大観・藤原氏師尹流』では、師尹—定時—実方—泰救—快真（熊野別当へ）—長

範—行範（重氏）鳥居氏へ—行忠—重茂—重俊—重勝—忠勝—忠俊—忠吉—忠景—重政—重春—重近—重賢—重元—忠次—忠明—忠吉

『藤原氏師尹流の由来』は、師尹—定時—実方—と救—快真（熊野別当へ）—長範—「鳥居」行範（重氏）—行忠—重茂—忠茂—重俊—重勝—忠勝—忠俊—忠吉—忠景—重政—重春—重近—重賢—重元—忠次—忠明—忠吉

『武家家伝・鳥居氏』、『寛政譜』は、鳥居法眼重氏—忠氏—忠茂—重俊—重勝—忠勝—忠俊—忠吉—忠景—重政—重春—重近—重賢—重元—忠次—忠明—忠吉

といった具合だが、もちろん全国研究者を尋ね歩けばもっとさまざまな捉えかたの系図に出会えると思うが、総じていえることはこれら系図で鳥居禪尼なる人物がどこにも記されていないことだ。

鳥居禪尼は、六条判官爲義と十五代熊野別当の娘立田との間に生まれ、十六代熊野別当長範の子行範と結婚して範^範・行快（二十二代熊野別当）・範命（二十三代熊野別当）・行遍（歌人）・娘（二十一代熊野別当湛増）・行詮（熊野権別当）・行増（熊野権別当）らの子をもうけるが、夫が承久三年（一一一五）十九代熊野別当に就いて間もなく急逝したため、菩提寺の東仙寺で剃髪し〈鳥居禪尼〉を、名のつたといわれる。

鳥居禪尼は紀伊国佐野莊・但馬国多々良莊地頭職にある幕府の御家人で、この知行地を養子に譲渡したい旨幕府に申し出ていたのが、それが認められて讓補が決まったと『吾妻鏡』には書かれている。

しかし養子が誰であったかについては触れられておらず、研究者の間では行詮の子行忠か長詮ではないかと推定しており、もしそうであるならば『系図纂要』、『武家家伝』、『寛政譜』がいう行範(重氏)を継承した忠氏、『姓氏類別大観』、『藤原氏師尹流の由来』にある行範を継いだ行忠がその人物ということになる。

もとより行範までの系図は一次史料に値する『熊野別当代々次第』によるもので信憑性が高いが、行範以降つまり、行範―忠氏、行範(重氏)鳥居氏へ―行忠氏、〔鳥居〕行範(重氏)―行忠、鳥居法眼―忠氏の鳥居氏始祖が行範を当てていることについてはいかにも不自然であり、作為・ねつ造以外の何ものでもない。

後世のわれわれには、〈鳥居氏の始祖は鳥居禪尼〉と、あった方が、どんなに分かり易いとか。

鳥居氏の始祖について『寛政譜』は熊野神社の神職の家系、と記している。

前述では、熊野別当職にあった行範の亡きあと鳥居禪尼を名のり、鳥居氏創建の橋渡し役を果たしたのではないかと述べた。

行範の家系は藤原氏師尹流（むつぎのりう）であり神別系図に属し、鳥居氏を新興した鳥居禪尼もその流れを重んじたことは当然で、熊野神社の神職とする『寛政譜』の記述は意になっっている。

しかし、鳥居氏について〈熊野山に一の鳥居を建てたことに起因〉とする謂は単なる伝承ではないか。熊野神社の成り立ちには鳥居氏始祖のはるか以前であり、すでに熊野山のみならず他の神々を祀神社には鳥居が存在していたし、その伝承は当たらないように思う。そのことよりも鳥居氏の始祖以降、熊野神社でどんな役回りの神職にあったかの究明が必要である。

由緒には、承久ノ乱のとき鳥居家の惣領だったとされる忠氏(行忠)は熊野神社が味方する幕府方(武家)につかず京方(後鳥羽上皇)についたため熊野を追われ三河国矢作莊渡里に移り住むようになったと記している。

しかし、鳥居禪尼の名譽と財を受け継いだ忠氏(または行忠)が名跡をも顧みずこのような裏切り行為に出ることは先ず考えにくい。南北朝の建武二年(一三三五)、後醍醐天皇(京方)の足利尊氏追討令をうけた新田義貞が刈谷の矢作川河岸と駿河の手越河原に参戦した際鳥居氏の十代忠景が新田軍に随従しているので、おそらくこのことを取り違えて後世に口碑・伝承したのではないかと思われる。

三河の矢作川流域には新田義貞と所縁（ゆかり）の氏族が多い。鳥居氏が三河に移住したのもこれらのことと無関係ではないだろう。

鎌倉幕府から室町幕府への政權移行には計り知れぬエネルギーがついやされている。貴族も武士も百姓も皆今を生きるのが精一杯であった。

名も実も捨てたりふり構わず身の置き場をさがして転々とするのが当たり前の時代である。鳥居氏が神職を捨てた経緯は定かでないが、南北朝政治体制がもたらす国家の二重構造による

国民への精神的負担は熊野神社にもおよんでいたはずで、神職者らの悶々とした苛立ち不安は相互間の疑心暗鬼、内部抗争を生み、その鎮静・収拾に厭離した別当が職を辞して還俗するなど、観応元年（一三五〇）熊野別当職に就く快宣を最後に、別当は出ていない。

鳥居忠景が住み始めたころの三河は、高師兼、高南宗継、仁木義長といったところが守護職に就いていた。新しい幕府は国別に強い権限を持つ守護を置いて内乱抑止と睨みを利かせるための武士団の結集を図ろうと試みたのだったが、それに対抗して荘の民百姓たちが村を形成して連帯を深め自立を目指したので、幕府の思惑は上滑りなものとなった。

まだまだ幕府の力は機能化しておらず、その隙を縫うように地侍も自らの新地拡大に馳せ、身をやつした残党も、大小百姓も体制の指針には無頓着に自分の道を進んでいる。これができたということは、権力の縛りが行き届かなかったか、手が回らなかったのだろうか。

忠景が住処を決める条件として選んだのは、居住と商いの両立だった。先ず彼は矢作川に着目した。東西上り下りの渡船である。また、それ以上に重視したものは東西通行の過客から入る耳寄りの諸国情報だった。この情報を商談に活用できると考えたのだ。

忠吉の代、三河制覇に駆け回る松平長親（道閔）への戦時物資と諸国情報の提供を通じて友好と信頼関係がはぐくまれ、ほかの譜代衆が農業者であるのと同様、忠吉も渡船・船宿・物流業を営む中で主従の関係ができていったのではないか。

鳥居氏の神職は、御師だったのではないかという人がいる。

御師とは、社寺へ参詣者を案内して参拝・祈祷・宿泊を世話する者で、熊野詣では御師を

〈師〉と呼び参詣者を〈檀那〉と呼ぶ師檀関係を結んで、全盛期には多大な財をなした御師もいた。

鳥居氏が三河に根を下ろした際の資金にこと欠かなかったのは、熊野での神職期に蓄えた財のほか、師檀関係での経済基盤が存続されていたからではないかとする見方もあるが、確かなことは分らない。十代忠景が熊野を追われた際は裸一貫だったとしても、御師としてのノウハウは身につけていたろうし、十八代忠吉にいたるまでもさまざまな事業展開を経つつも、集大成として渡船、船宿経営、物資流通事業が成り立ったのではないかと思われる。

煎本増夫著『戦国時代の徳川氏』も、〈忠吉は今川支配下の家康直臣団（岡崎衆）の惣奉行で、宿老的な地位にあり、家康の帰城にそなえて「米穀資財」を貯えていたとされる。おそらく忠吉は本証寺の経済活動にかかわりをもつ商人的武士であり有力門徒であったと思うが（後略）と書いている。

忠吉の才覚を見出した道閔の眼力もさることながら、清康・家康の使いこなしも見事だった。

天文四年の落日

松平清康は、沈着と大胆さをあわせ持つ武將だった。

事を予断し、それに処する幾通りかの手立てを考へ抜く慎重な一面、考へが固まってからの行動が速い。行動を押し出す根のところには〈民〉と〈村〉への強い思いがあった。

太郎左衛門尉親氏がつくりあげた〈松平郷〉という共存協働型村社会の理念、祖父道闕の公正無私な治世観・人心収攬の教えがある。

東三河の牧野信定・戸田憲光を討ち取って、三河平定が成ってから清康は奢らず高ぶらず、平穩に政務をこなしていた。

だが譜代衆の間には張りつめた緊張感がただよっていた。それが何によるものかはっきり口にする者はいないが、かえってそれが不気味だった。

享禄二年（一五二九）の東三河勝戦後は家中が大きな輪で固められ、三河を束ねる清康は押すに押されぬ軍勢七千の将になっていた。

清康はここぞとばかり同二年八名郡宇利の熊谷重実、三年には東尾張品野の坂井秀忠、岩崎の荒川頼宗、四年賀茂郡伊保の三宅政盛と攻略、打ち負かして領を広げている。

一連の戦で桜井信定の働きは他を圧倒していた。

論功行賞は信定が一人攫った。品野・岩崎を手中にしたのである。

一門・国人衆から露骨な不満が爆発した。

清康は、いたって冷静に、

「桜井殿は、今川氏豊が那古野城を築いたとき出城の川村・小幡に対抗して守山砦を築営された。いまにして守山は貴重な西（織田）の防壁となっている。桜井殿の智略・先見の明、見事というほかはない。これからは守山にあわせ品野・岩崎の三砦がわが三河の盾となる」と、信定築城の先見を讃え、懇ろに不満分子をいい含めた。

しかし、清康のいう北条氏豊對抗策としての守山築城には〈あの状況でなぜ信定が北条の見張り役とならなければならなかったのか。織田のためなのか、三河の前線としての使命感だったのか〉異論が多いのも事実だ。

とくに一門衆の間では織田信秀・桜井信定の盟友説が強い。

根拠は、深溝忠定が連歌師宗長から聞いたという〈信定が守山築城祝いの席に織田信秀を招いていた〉の死際に残した一言である。確かに、大永七年（一五二七）連歌師宗長は生まれ故郷の駿河への帰途深溝に足を休めている（『新編安城市史5資料編』）。忠定の屋敷に招き酒を酌み交わす中でぼろり宗長の口からこぼれ出た言葉だったのか、あるいは村の誰かが深溝家の家人の耳に入れてくれたことなのかそのあたりは定かでない。いずれにせよ宗家思いの忠定としては大いに驚いたことだろう。

大永六年信定は宗長を守山砦に招き千句連歌会を主催している。

《花にけふ風を関守山路哉》の発句『宗長手記』を残しているし、織田信秀とその一族との縁戚を結び、友好を深めているところからも、一連の信定の行動には松平一門への揺さぶりと受け止められても仕方のない言動が目につく。

その信定が今度は、《今こそ勝ち戦の余勢を織田にぶつけるべきときだ》、《戦闘準備に入るべき》と一族にふれ回り、国人衆を叩りたてているのだ。

しかし、清康はそれを耳にしても黙認し、受け流した。

すでに清康の腹は固まっていた。清康は走り番を使って、信定の在城先を逐次詳細に報告させ、譜代衆には、戦準備をいい含めていた。

重正は、浦方百姓から届いたばかりの子持ち鯉の甘露煮を手土産に桜井館に信定を訪ねていた。近頃の信定は桜井滞在がほとんどで、守山には月に二三次出向くぐらいである。満面精力に充ちあふれ、笑みをたたえて機嫌良く、重正を迎え入れた。

「倅殿の出仕が適ったそうじゃの」

「まだまだ、文武礼節とも未熟ゆえ、今しばらくのご猶予をお願い申し上げますが……」

「直ぐ連れてまいれ、と申したのであらう？」

「はい」

「清康殿という人は、目利きのいいお方じゃ。きっとお子は傑物になろうぞ」

「もったいなきお言葉、かたじけなく存じます」

八蔵の出仕の日は上野館主内藤清長に連れられた甥甚一郎も一緒だった。甚一郎の方が一年長だが全体に細身で八蔵の方が一回り大きい。清康が現れる間畏まり平伏する初々しい二人の姿は、清長にも重正にもかつての自分を見る思いだった。

やがて清康が現れると、甚一郎が緊張のためか全身を震わせ腕立て肘が折れ、体が前へのめってしまふほどだった。清康は苦笑しながら、

「そんなに畏まらずともよい。清康じゃ。兩人顔を見せよ」と促した。

二人は徐におそろおそろ顔をあげた。と、そこに笑顔の清康があった。二人はまた畏まって平伏した。

「内藤甚一郎と本多八蔵であったな。どちらが甚一郎か？」

「はい。私が内藤彌次右衛門の嫡男甚一郎にございます。不束ながら一所懸命文武に励み、身命にかえ御館様にお尽くし申し上げますゆえ、何とぞお役を賜りますようお願い仕まつります」

「その言上、忘れるでないぞ」

八蔵も同じ口上を述べ、清康から記念の湯呑を賜った。拝謁がとどこおりなく済んで親子四人は城を退き、外堀代わりの菅生川の橋のたもとで別れた。別れてから重正と八蔵は浚い泥の

乾いた土手道を歩き、嬉しそうに賜り物を小脇に抱え、早足で歩く八蔵の姿に重正は、新たな時代の足音を耳にした。

「今日の御用向きは、織田攻めのことではないのか？」

意表を突かれて重正は、吾を取り戻した。

「岡崎の殿とおわにかま蟠わにかまりのことで参りましてございます。桜井様のお遠のきを殿は至極お氣にとめておられます。宇利攻めでの一件はもう随分と日がたちましてございます故、こは是非にもご海容を賜り、ご一門睦まじゅう願わねば、とてもとても織田攻めなど覚束かぬことにございます」

宇利攻めの一件とは、享祿二年（一五三〇）宇利の熊谷重美攻略のとき、最前線で苦戦する松平一門の福釜親盛・親次父子を横目に手をかさなかつた信定を、清康が衆目憚らず面詰したことへの怨念である。

「君は舟、臣は水にて候。水よく舟を浮べ候ことにて候。舟候も水なく候えば、相叶はず候か、であつたかな？毛利家の志道広良も逸材だが、わが三河には志道にもまさる本多重正がおる。心強いことじゃ。信定が水になることで三河が馥郁ふいくと栄えるのであれば存分にいたせ」

言葉ではそうであっても、信定の心は一向に和らいではない。むしろ、清康を突放しているようにさえ感じとれる。和解には程遠い。

重正は、〈舟候も水なく候えば、相叶はず〉に、こたわった。

先代信忠失脚のとき、信定を推挙せず清康に家督を継がせた道闕への義憤と怨念が、いまだ

癒えぬまま信定の五臓をかきむしっていた。〈道闕様にぶつけられない全てが殿に向かつている〉と重正は感じた。

清康もそのことは承知しつつも万端に処してきた。

だからこそ、政事・戦・祭にかかわる主家の趣向を先ず信定へ発信し、その反応を見極めながらことを進めてきた。

だが信定は、〈自分は疎外されている〉と受け止めていた。

そして道闕の影を感じていた。

〈道闕がいる限り現状を変えることはできない〉という憤りが焦りに変わり、理知の抑制、松平一門の一員である誇りも自覚も失念させるほど追い込まれていく。そんな己の不甲斐なさを何とか立て直そうと自戒もし、〈結局、自分は三河の松平信定であるべきなのだ〉と憤りを鎮めるのであった。

信定は東三河平定の遠征から帰還したとき、出迎えた留守居役の重正に歩み寄り、
「隣国は皆守護大名上がりの領袖りょうしゆばかりじゃ。三河を見よ、地下じげの清康殿が凌駕りやうがした。これはたいへんな快挙なのだ」

こういつて清康の凱旋を評価した。

あのときの信定の言葉は清明で、濁りがなかった。

清康が目指している指針そのものに背を向けているとは思えなかった。

信定の異存は政事を運ぶ、根の柢きところにあるのではないか。

重正は、いろいろな角度を変え検証していくと思わぬことにぶつかった。〈本来、清康を支えるのは自分であって道閤ではない〉といった信定の存念がぼんやりと見えてきたのだ。〈これは、尋常ではないぞ〉重正は身を震わせた。

同時刻、岡崎城の清康は、道閤と闘茶を楽しんでいた。

対座する兩人各後ろに風呂敷包みが各一巾。道閤寄りに本茶入朱塗り棗一筒。中央にしつらえられた敷板付き置炉・五徳、やや色くすんだ炉竈。脇に茶碗六器と建水一器、平型の後手急須錫物二器、瀬戸物三器、柄杓が無造作に置かれてある。

「あらかた忠吉が取り揃えてくれました」

「炉釜は大層な年期物。謂れは？」

「持ち込んだ目利きの触れ込みでは、月待山禁の廃寺跡から拾遺いたしたものとかな」

「あのあたりには確か、義政公の慈照寺があったな」

「はい」

「茶は遊に非ず藝に非ず一味清浄・法喜禅悦の境地、と公は吐露しておられる。ご心境お勞しくあれどもいささか理解が及ばぬ。お気持ちだけの言葉ではいまひとつ心もとない。型と心が一つであってこそ形。残念ながら公の生きざまには型が欠けておられた。実がない。花のみじゃ。観念で俗世の虚飯は渡れぬ。授かった境遇を生き、切り拓き、生きる。これが人の道の常だ。先哲は〈阿留辺幾夜宇和〉という名言を残しておられる。われらの道は、これじゃ」

道閤は自分に言い聞かせるように、背いた。

明恵の含蓄はそのまま松平一門の生きざまでもあった。幼少時には清康が厭というほどたつき込まれた一言である。

炉釜の湯が沸々と釜鳴りをたてている。

「本日の湯水は岩津妙心寺の井戸水にございます。なお、双方それぞれが持参いたした非茶はお打ち合わせ通り二筒ずつ。非茶の品数を控えました分、本茶には高山寺領の逸品を用意いたしました」

口上に合わせるように、清康は手際を利かせ、茶碗、急須、本茶の棗を手前にそろえた。

「ほう、それは楽しみじゃ」

と応じながら、道閤は、本茶の入った棗を右に左に見入った。

瞬時、間を置いて、

「では、始めます」

と道閤に一礼。

「お手柔らかに」

と清康に一礼。

清康は懐からこぶくさを手に、釜蓋の摘に宛がって、とった蓋を手前に置いてから背筋を伸ばし柄杓を手に取って、段取りの茶具に目を走らせ、ゆっくりと棗を手にし蓋を開け、心持道閤の顔にそれを近づけた一瞬、茶葉の濃渾な芳馥が二人の空間にただよった。

思わず道閥は呻^{うな}った。

酔う間に、急須に茶匙二つ、釜蓋の湯がそがれ、蓋をして、

「お淹れ仕まつる」

「お願申す」

清康は兩人の茶碗交互に淹れ、それぞれの前に置く。

「お先に頂戴いたす」

と道閥が一礼。

「某^{それがし}も、頂戴いたす」

清康も一礼。

兩人、口に含んだ茶を舌にのせ、それを数回繰り返して、兩人揃えて碗を置いた。

「結構でござった」

「結構でござった」

と一礼。

道閥と清康の闘茶は仕切り役を置かず、非茶を持ち込んだ本人が茶葉を淹れる。

当り外れを興じ競うのではなく、世間の話を談じながら折りなす会話の洒脱^{しやだつ}の妙を楽しみ、身につけた非茶の知の世界に互いが相手をいざなう遊びでもある。

これは二人だけの作法であり、流儀だった。

六十二歳の道閥と二十五歳清康は紛れもない祖父と孫の閥係である。

しかし、清康は少しも見劣りしていない。

それどころか泰然自若、對話が囁み合っている。道閥が譲っているわけではなく、清康が道閥の世界に遊んでいる印象すらある。

道閥もそれを感じていた。

「守山に織田信光が入ったとの噂がある？」

「織田信秀が今川から奪い取った那古野^{なこや}に信長を住まわせ、自らは古渡館を築営して居城としたやに聞いております。いまや守山は織田の三角拠点の一角、いざとなれば織田にも三河にも貸しがつくれる要塞^{ようさい}。計算高い桜井殿がそう簡単に手放すわけがございませぬ」

「儂^{わし}もそう思うておった。守山あればこそ織田にも三河にも天秤^{てんびん}が担げる」

「その桜井殿がなぜあれほどに織田との戦をおおるのか、その真意が読めませぬ」

「いっその事、信定の首を討ちとっては」

「それも考えましたが、隣国に三河内戦の印象を与えるのはいかがかと」

「それは織田も同じじゃ」

「織田攻めを装いつつ守山の内実をこの目で確かめ、決断いたしまする」

「勝幡館は奥まっておったが、古渡館は那古屋と守山が目と鼻の先。信定討ち取りに手間取るようなことにでもなれば、とんでもないことになるぞ。敵地での戦には落とし穴が多い。石橋をたたいて、慎重にの」

重正は岡崎に登って、桜井信定と会った感触を清康に報告していた。

「舟候も水なく候えば、相叶はずと？」

清康はめずらしく険のある表情を見せた。重正も、そんな清康を見るのは初めてであった。一瞬であったが心の揺れのようなものが見られた。

「今こそ舟と水が一つになって、西に照準を合わせようとの仰せのように、重正には聞き取れましてございます」

「そうであろう。そうでなければならぬ」

上擦りながらも、辛うじて主としての沾券こげんを見せた。

重正は、追い詰められている清康に、異常を感じた。

天文四年（一五三五）師走。

清康は、桜井信定に出陣布令を伝達の使いを發てた。ところが、一旦体調不調を理由に参陣を濁らせ、しばらく考え込んでから使者に、

「承知いたしましたとお伝え申せ」といった。

しかし、信定は出陣当日になって参陣を翻し、〈守山砦でお待ちする〉に変更した。

使者の言上を目の当たりにした一門衆の深溝良景が、清康の前に進み出て、

「左様な身勝手、厳しく処罰いたされたく敢えて言上仕まつる」

激しく怒りをぶつけた。

「残念ながら、そうしなければならぬ」

唇を震わせながら清康は応えた。

清康は三日、五千の兵と岡崎を發った。

小雪まじりの寒い朝だった。

清康は馬の背にゆられながら〈信定はなぜ、守山で待つことになったのか〉考え続けた。守山に直行すべきか、信秀の古渡館を目指すべきか逡巡していた。

守山砦へ直行する場合は〈信定の在城〉、〈織田方の在城〉、〈信定と織田方の連合〉が考えられた。それぞれ皆対応が異なる。

自問自答が続いた。信定だけを攻め落とすのであれば、道閥がいうように桜井に攻め込んだ方が手っ取り早い。

しかし、三河の松平一門と、いま織田家が抱え持つ内輪の現況を見比べてみると、〈力関係において今が一番拮抗している時期〉と清康は分析したのだ。

そのとき清康は〈そうだ、岩崎に立ち寄ろう〉と思いついた。

岩崎砦は信定の嫡男清定の持城である。

〈清定をまじえて談義の場を設ければよい〉

「五郎右衛門をこれへ！」

清康は側衆へ命じた。

大久保五郎右衛門忠俊は、尾張り攻めの先衆七手の惣頭である。

忠俊がすぐに駆けつけ馬身を清康の左につけて馬脚をそろえると、

「これより岩崎へ向かう」

「ははっ」

筋生・福谷のあたりでは寒さも和らぎ、小雪もやんでいた。彼方に御岳山が見え始めた。

岩崎の館は御岳の麓だ。

頻りに、伝令が行きかっている。

清康は、いつもの晴々しい落ち着いた武将の顔になっていた。

腹が、据わったのである。

「お立ちより、お待ち申しておりました」

「立ち寄りには、誰にも申してはおらぬが」

「父より、守山へご案内を仰せつかりましてございます」

「そうであったか。世話をかけるぞ」

「お世話仕まつりまする」

清康は、夜食を一門衆と共にした。

皆、敵陣へ乗り込む緊張感のようなものは誰からも感じられない。

翌昼過ぎ清康と一行は、清定と共に岩崎を出、長湫・猪仔から反りあがるような地形が続く段丘を視界しながら、緩やかな勾配で下る矢田川河岸の谷道を大きく迂回し、矢田川と庄内川

の河川敷が接する谷和原にたどりついた。

守山砦到着は、昨日岩崎館に着いたころ合いで、まだ野山が視力で確かめられる時分だった。

清康は、隊をそこに置いたまま桜井信清と、側衆の内藤清長・植村氏義の手勢百ほを率いて館に登った。

信定と老臣らが大手門まで足を運んで、馬上の清康を出迎えた。

「よくぞお出ましなされました」

「心遣い忝く存ずる」

「手前こそ、ご無礼仕まつりました」

清康は馬を下り、手綱を馬廻役へ渡して、信定の案内で砦内を見聞した。

砦は九百坪ほどの敷地四隅に物見櫓、真ん中に粗末な平屋の母屋と雑穀蔵があるだけの簡素なものだが、眼下南に矢田川、北東に東谷山・小幡砦が望めた。

「織田信秀殿の御館はその矢田川の先二里半ほどの段丘にございます」

「明六つに発てば朝五つに着くことになる」

「その時分はまだ、暗うございます。食事時に奇襲を？」

「いや、例えばの話でございます」

「左様でございますよう」

「ご案内役をお願いしたい」

「畏まりましてございます」

信定があっさり受けたので、清康は拍子抜けした。

夜は小宴があったが、酒は皆、控えた。

清康は心をゆるし、その夜は熟睡した。

五日未明。

清康は人の気配を感じた。確かに部屋の隅に誰かがいる。

「何者じゃ」

「阿部大蔵の倅、彌七郎にございます。お命頂戴仕まつる」

絞り出すような声であった。

「早まるでない。気をしずめて、分けを申せ」

「父は桜井様の企てを諫め、自重を促してまいっただけでございます。それをなぜ斯様な屈辱を受けねばなりませんか！あなたは前君同様、無慈悲、非道の御方、誅せられて当然にございます！断じて父は、一味同心などではありませんせぬ」

「経緯を申してみよ」

「問答無用、お覚悟あれ！」

と清康の胸板に刃を一突き。

一瞬の遅れで、入り込んできたのは側衆植村氏義と内藤清長だった。

主がうつ伏せに倒れ、その脇に、放心した彌七郎が座っていた。

「それは何かの間違いじゃ。其方の父は家中一の忠義者ぞ。清康は有り難く思うておる。何か

の勘違いじゃ。それを言い触らす者をここへ連れてまいれ。清康が成敗してやる」

「しっかり致されませ！」

抱き起こす内藤清長に、清康はふりしぼる声で、

「この儀、是非に及ばず。定吉を手厚く……」

と、いい残した。

その時、放心して座り込む彌七郎に、植村氏義の刃が下りた。

事件について『寛政譜』は、へ清康が守山へ出陣したすきをねらって、桜井松平氏の当主桜井信定が織田信秀に通じて兵を起こした。阿部大蔵はしばしば使いを送って信定を諫めていたが、守山陣中では阿部大蔵も一味同心である、との流言がひろまった。大蔵は彌七郎呼び寄せ、陣中にわが身にかかわる噂話が実しやかに広まっているが、この身は晴朗潔癖であるが、思いもよらず誅せられんともかきらない。お前はこの場を去り、時を見はからって無罪を訴えてよと、記している。

事件を知った八蔵の驚きは大きかった。

三日三晩食を断ち、座禅した。

清康との主従関係は、僅か五ヶ月だった。

作左衛門重次の妻

作左衛門重次の室^{おのう}於濃は、後添^{のちぞ}いである。

前妻は糟糠^{そうこう}の妻であったが、肺炎のため、十歳、九歳、三歳の幼い姉妹を残して他界した。重正・重次父子は、途方に暮れた。

このとき重次は三河三奉行の要職にあった。

重次の主君家康は、桶狭間ノ戦で今川義元が討死したのを機に今川氏との友好を断ち切り、織田信長についた。同盟が成ったことで家康は三河国の領袖の座を取り返したが、内々に大きな問題を抱えていた。西三河矢作川南部に点在する本證寺、上宮寺、勝鬘寺門徒衆との不和・拗れである。

事の始まりは、〈境内で一向宗門徒が市と称してひらく米穀の売買・金貸し、日用雜貨などの商取引は寺社が行うに相応しからざる行為〉と中止を求める徳川家に対し、〈寺社境内での事業は守護不入の領域〉と突っぱねる門徒衆側の言い分が平行線をたどって、業を煮やした徳川側が陽動作戦に及んだのである。というのが実相であろう。

その様子は『三河物語』が〈守護不入にして、何事も他所の支配をうけざる故、野寺本証寺

中を借り、家作をいたし、蔵を建て、金銀米銭の走りを作る處に、岡崎の御家中衆意恨有之方、寺中へ馬を乗り入れて、鳥居か庭に干し置きし米穀等を散々に蹴散らかし、其外放埒の振舞、幾々度々に重なれハ、此段無念至極に存し、寺中の同宿、百姓等、鳥居一類相集、棒ちきりきを持って出、寺中へ入れしと追払ひ、乗り放置く馬を取、尾髪を切て追放せハ〉と書きとめている。

この騒動を隣国の信長はどう見ていたかというところ、〈三川国端に土呂・佐座喜・大濱・鷺塚とて、海手へ付いて然るべき要塞、富貴にして人多き湊なり、大坂より代坊主人置き、門徒繁昌候て『信長公記』と状況を分析した上で、いま自分自身が局面している一大宗教武裝勢力石山本願寺の実相を見ているだけに、〈徹底的に叩き潰すべし〉と思ったであろうし、家康の対処には満足だったに違いない。

武力行使で家康を悩ませたのは、門徒衆の中に祖父清康時代の譜代衆・国衆があまた名を列ねていることだった。

打開を図るため家康は自ら一軒一軒門徒家臣宅へ足を運び、念入りに同心を説得している。これが功を奏し、石川数正・家成、本多広孝、酒井忠次、高力清長、植村正勝、酒井正親、本多忠勝、本多重正・重次、内藤義清・家長・信成・正成・忠政、鳥居忠吉・元忠、天野康景・康親らから浄土宗改宗を取り付け、味方に引き込むことに成功している。結果として、家康は戦をものにした。

重次が三河三奉行の要職に就いたのはこの直後であった。

徳川家康は、三河一向一揆という家中を二分した苦渋の戦をもぎったことで、再生三河に拍車をかけた。

まさに、高力清長・天野康景・本多重次の三河三奉行人事はその第一段だった。

三人は見事な連携ぶりを見せ、見る見る岡崎城下の治安は平靜さを取り戻し、家中擁護にも結束の気配が見え始め、東三河旗頭酒井忠次・西三河旗頭石川数正をして「心おきなく外へ目が向けられる態勢」と言わしめるほどになろうとしていた。

重い任務を担う重次の立場を慮った鳥居元忠は、

「しばらく於濃を、重次様御留守宅へ出向かせては如何かと思いますが……」

と父忠吉に相談を持ちかけた。

すると忠吉もその一言を待っていた様子で、

「そういうことは早く言うてくれねば、動けぬではないか」

不機嫌げに言い返し、そそくさと上下に着替えて家を出て行った。

今御堂の渡し場から大平村の本多館までは、随分道のりがある。

老いは、侮れない。やっとの思いで本多家にたどり着くと、幼い三人の姉妹が縁側に肩寄せ合うように座り、築山庭でざわめく竹林をながめていた。

玄関に出迎えたのは老女だった。

重正は臥せていたらしく床から身をおこし、忠吉を迎えた。

「わしの一番下の実妹じゃ。本当に助かっておる」

「それは、何よりじゃ」

「ご嫡男も御旗本の先手侍大将におなりと聞き申した。目出たいことじゃ」

「今日は重次殿のことでまいった。どうじゃ、しばらく於濃をここで使うてくださらぬか。於濃が母親を亡くしたのも、こちらのお子くらのころであった。何かとお子らの力になると思うが……」

唐突な忠吉の申し入れに、重正は返答に窮した。

「心配をかけるの」

ぼつりと応えただけだった。

於濃は三十を迎えるが、まだ独り身だった。

母親を早くに亡くし、父の忠吉が後添いを迎えなかったこともあって、本宅と舟宿の家政を委ねてきたが、いまや概要の材となっていた。

忠吉はここまで留め置いた自分を悔いた。

縁側で見た本多家の幼児が、母親を亡くした於濃にかさなって見えた。

鳥居氏が、本多氏と関わりを持つようになったのは、十代忠景のときである。

祖は熊野神社の神職で、鎌倉幕府対御所の主導権争いが高じて起きた「承久ノ乱」のおり、京側に加担した咎で神職を解かれ熊野追放のはめとなった。徳川家の祖徳阿弥がそうであたように、忠景も諸国放浪中たまたま本多氏の知遇を得、姓を渡里と改めて矢作庄に居を構えた。しばらくして舟宿を起業、さらに渡舟・廻船問屋を手掛けると松平一門庶家への出入りも許さ

れるようになり、熊野での杵柄・人脈を生かすなどして地方では滅多に入手できない戦備品・御館補修備品の調達、また戦時の兵糧の確保・貯蔵など手広く用達できる御用商人として能吏を發揮、ついに譜代衆に加えられた。

これを機に渡里姓を旧姓に戻している。

渡里の渡し場と今御堂の渡し場は鎌倉街道の東西往来をつなぐ要衝で、この所管は鳥居家が掌握していた。渡里の渡し場の直ぐ後ろは台地状の森で、その森そのものが鳥居氏の屋敷だった。その裏手の麓が舟宿だった。東海道からやや離れた脇街道であるが、旅馴れた客はわざわざ渡里まで足をのばす。森の麓から湧き出る清水は知る人ぞ知る隠れ場で、深山を背に矢作川を眺めながらいただく一杯の清涼は、旅人の疲れをなごめた。

本宅は舟宿脇の竹林の中を上りつめ、さらに、築山庭、家人長屋、厩、木小屋、米蔵と続く奥に、一際大きな建屋に行きつく。本宅である。決して大層な造りではない。

しかし、矢作川が水嵩を増すと、いつも舟宿は床下まで水がおよんだ。菅生川と矢作川の合流地帯だからである。対岸の上和田村槽目に屋敷を持つ本多家も同じだった。

代々、共に水とのたたかいを強いられてきた。この一帯には流作場をもつ脇百姓・脇在家が多く、両家も支配地に百姓を多くかかえていた。そのため川欠対策と深く関わりを持つようになり、協力し合って治水・水防施業に身を入れてきた。

重正も忠吉も城勤めは致仕し、ひとところのような行き来は少なくなったものの、昵懇であることには変わりなかった。両家の気脈も川欠対策の課題も、双方子供らがしっかり承継してく

れていることはありがたいことだった。

もとより川欠対策は、上和田・渡里地域だけに限られた狭義な問題ではない。

岡崎そして、三河国全土にわたる課題でもある。為政者たちは、〈水害は自然が為せる業〉と匙を投げ、半ば傍観放置しがちだった。

しかし、人が生き、田畑を耕し、村を興し、国を建てるのであれば、為したるものを守りぬき育てるのが政事ではないのか、という声が起こるのは当然のことであった。ありとあらゆるものを一呑みにうばいとしてしまう災害との向き合い、食い止める手立て、対抗策を講じてこそ村は栄え、民が住みつき、村の和がうまれ、治世が潤う。

重正も忠吉も互いにそう思いながら川欠と取り組んできたのだった。

〈自然の理と人の営みが共に両立できないものか〉、〈戦は心の貧困がもたらすものだ〉というとらえ方、ここに発心したのが三河では松平清康が最初だった。

もちろん、思想的には徳阿弥の村づくり理念と共通するものだが、徳阿弥時代の住環境はもっぱら山間部で、麓の湿地帯で繰り返し起こる水害は対岸の火事に過ぎなかった。

清康が水との闘いを意識せざるを得なかったのは、国盗りが進む過程で先々のさまざまな地形・自然環境を目の当たりにした結果、即対応の必要を迫られたのだ。

領袖が領を守り育てるのは当然のことだが、領袖が皆、清康と同じ哲学をもって処したかといえど大方の領袖は身銭を惜しみ、大局、将来に目を向ける者など極々少なかった。

それは、歴史が証明している。

「於濃殿が台所を手伝うてくださればこんな結構なことはない。しかし、世間がゆるすまい。於濃殿に傷がついては申し開きがたため」

重正が、控え目に断ると、

「於濃が、そうしたいと申し出ているのだ。受けてはくれぬか」

忠吉の言わんとするところは、〈於濃は重次の嫁になってもいいといっている〉ということだった。重正はこの旨を、浜松滞在の重次に書状を送った。

間もなくして、重次から〈良しなに〉の返信が届いた。

おりから越前一乗谷城朝倉義景・近江小谷城浅井長政が織田信長の御意を断ったとの噂が三河に伝わっていた。朝倉・織田は斯波氏が尾張国守護だったおり互いに家老職で、織田にいわせれば朝倉は主を陥れた逆臣の家系と見ていたし、朝倉は朝倉で織田は陪臣の家だと蔑んでいた。なので、何かの行き違いで何れ争いが起こると見ていた。

重次が予期した通り織田信長は浅井・朝倉討伐を家康に伝え、参戦するよう命じた。家康には参戦の大義名分はなかったが、盟約がある以上参陣は当然だった。

家康が陣所におもむくと信長はかぶっていた笠をぬぎ、

「酷暑きびしき中、遠路の参陣まことに苦勞に存じます」

と謝意を述べた。信長は余程、家康の参陣がうれしかたのだろう。

戦は怨念あり、叛旗・裏切りあり、頻々謀報乱れ飛ぶ頭脳戦略を実体験し、家康は多くのものを学んだ。

岡崎に凱旋した家康は重臣の前に、

「此度の戦で織田殿は一段と西における重石を増すであろう。われらは武田との向き合いに集中することになる。新たな館を視野に、検討いたさねばなるまい」

と予断を促し、間髪をいれず浜松曳馬に築城を決めた。

このとき重次にも築城差配の役割分担が課せられている。重次は一層身を引き締めて公務に奮励しなければならなかった。

元亀元年（一五七〇）とは、どんな時期だったかを時系列的に追ってみると、

- ・ 前年から始めていた新居城〈見附城〉普請を、水利の不便で断念。
- ・ 居城として遠江国浜松〈曳馬城〉の正月着工、（九月竣工・入城）。
- ・ 正月廿三日、信長、五畿内二十一ヵ国諸大名に上洛を促し、朝廷・室町幕府礼参の触状を送る。

・ 家康上洛のため遠江・三河の家臣をひきつれ岡崎を発つ。

・ 越前国朝倉景健、信長の促しを拒絶したため、信長は討伐に発ち、家康も従軍す。

・ 六月二十八日織田徳川連合軍、朝倉浅井連合軍と姉川で合戦、これを破る。

・ 九月十二日、家康浜松に居城を移し、岡崎城を信康に託す。

・ 十月八日いえやす、越後上杉輝虎に武田信玄と断交する旨の起請文を送り盟約締結す。

『徳川家康の全軌跡』より引用

祝言は、両家だけの簡略なものとなった。

重次四十一、於濃二十九であつた。

祝言が済むと、二人は褥に体を休めた。

「いつか必ず、このようにあなた様のもとで、お尽くしがかなう日がまいると思つておりましたの」

「何かと面倒をかけるが、良しなにの」

「精一杯、精根をすえてお勉め申し上げます」

「家康様はたいへんな思いで家中の難題と取り組んでこられた。お疲れもあるが、それは家中の皆も同じこと。お気を引き締めて奮励していただかねばならぬ。ここで一息つかれてはとんでもないことになるのだ。苦い過去を無駄にしてはならぬ。これからが本当の正念場のじゃ。ここをしっかりご援護申し上げるのが私の役目でもある。世話をかけるが、力になってくれ」

重次は、本多家を承継する男子を、於濃に求めた。
すると於濃は、

「そう、急かしてことが成るものではありません。女子は子を産むだけでも大事、生まれてくるお子は、男子でも女子でも、大変なことなのですよ」

と灸をすえた。

重次は一夜をすこし、翌朝早く、浜松へ向けて馬を走らせた

於濃は家政を預かり、三人の子をしっかり受けとめて、心をくだいた。

於濃は、前妻が残した家事道具・用品一切を重宝し、またそれを良しとした。

堅調な家政の遣り繰り、子供たちへ寄せるたおやかな母性の慈愛、舅への弁え、どれも平明でほどよく落着きがとれ、しかも自然体なのだ。

重次は幼いころから兩家行き来の中で近しく於濃の成長過程を見てきたが、家族からも、舟宿の仲居・女中からも可愛がられ、日課の《文正草子》の唔咄を早々にすませると、年季奉公の女中と土手へ出かけ草花を摘んだり、屋敷中をはしゃぎ回る子供だった。あの天真爛漫な日常観のどこに家訓・礼節・式法・教養を学びとる時を割き、身に潜逸させることができたのだろう。何より於濃が加わったことで本多の家は大きな力をもらうことができたようだ。ただただ草廬三顧の思いだった。

こんなことがあつたとも聞く。

兎絲の他界後、鳥居家の御台所は於濃が仕切り、舟宿の仲居・女中が交代で妨ことになった。台所はいつもにぎやかだった。皆それなりに自覚はしているが、自由に振舞っていた。自由は結構だが羽目を外されては困るのであった。家政の規律は厳守してもらわねばならない。

台所方が何不自由なく切り盛りしてくれる有難さ、感謝の気持ちと、一家の規律・母の領域を侵されることへの加減・節度について考えさせられることも度々だった。しかし、羽目を外したからといって母娘ほど齢のひらいた台所方に物申すのには勇氣がいる。どう論し、理解を求めればよいのか、なかなか行動に移せなかった。

ある早朝、台所が尋常でない。大声で喚き合っている。只事ではないようだ。於濃が駆け付けて、

「鎮かになさい！」
と叱った。

女たちが何かに脅えている様子だ。

ほの暗い土間の真ん中で、棒のような図体の長虫が亀頭を拾げ、女たちを窺っている。屋根裏から落ちたのであろう。

女中たちを叱った手前、目の前のものを処置しなければならない。

於濃は咄嗟に、台所方が手にしている包丁をもぎとるなり肌襦袢を切り裂き、それを手に巻きつけるや、身の丈ほどもある長虫の亀頭を握り、持ちあげ、見栄をきって躍る図体を戸外へ放りなげた。

後でこの話を耳にした忠吉は、

「於濃は、そういう娘よ」

といって満足げに何回も肯いていたという。

於濃はいつも母親にまとわりついて台所に入りひたり、具の包丁さばきや煮炊きの様子を覗くでは、見よう見まねで覚えた御造りを家族にふるまうのが好きだった。

於濃の得意は、母親から学んだ呉であった。

呉は、水に浸した大豆をよくすりつぶし、水で薄めて釜煮・沸騰させ、にがりを加えてつく。今でいう豆腐の前身である。

於濃の呉は、団欒を和ませてくれる一品だった。

忠吉以下、嫡男の忠宗、次男忠明（本翁意伯）、三男元忠、四男忠広、母菟絲が座について、下座でかしこまる於濃が初々しい。

「では、いただこう」

と忠吉が家族に促し、皆で、

「いただきます」

を唱和する。

於濃は真顔で家族一人一人が食する箸の動きを見定めながら、

「忠宗お兄様、お味のほどはいかがでございますか？」

とたずねる。

「なかなか結構。舌のさわりも柔らかで、誠に結構」

「忠明お兄様は？」

「於濃殿のお心尽くし、五臓にしみわたる思いがいたします。何分、仏事を修する者は毎日が精進物、時には鴨汁などの味の強めのものが無性になつかしく思うことがあるのです。もちろん、於濃殿の呉も忘れませんよ」

というと、隣の元忠が笑いをこらえるように、

「兄上、そのような世辞はおやめなされ。旨いまずいでお答えなさればよい。そうであろう、於濃」

「元忠お兄様のお舌は、食べるだけのお舌。丹精の御造りはお舌でゆっくり、やさしくいたわりながらいただくのです」

諭すように言い返すと、

「そうですよ。於濃のいうとおりです。膳のものは一品一品、よくかみしめながら、台所方の思いも一緒に味わうものですよ」

と、兎絲が娘をいたわるように後押しをする。

その母娘の掛け合いを忠吉は目を細め、じっと見守っている。

戦国の武家に平穩はない。

至福は長くは続かなかった。

天文十六年（一五四七）嫡男忠宗が小豆沢ノ戦において十八歳の若さで戦死した。

忠明に出家を決心させたものは、武士の非業を〈無〉に置きかえてしまう武家の道理に不信を抱いたからだだった。

忠明は修業先の寺が決まりいよいよ旅発つ日となった。

母屋門の前にそそり佇つ一本の辛夷の木の下で、忠吉と重次を囲むように元忠、忠広、兎絲、於濃、家人、厩人、船宿衆が並び、思い思いに若者との別れを惜しんでいた。

「道に迷った時は、この辛夷の木を思い出すがよい」

ぼつりと忠吉がいった。

まだ蕾は固いが、その花房は糸乱れず北へ向けて生氣をはなっている。

「然と、心いたします」

忠明は一人一人に挨拶をして回った。母の兎絲のところに戻ったとき母は紙に包んだものを、そっと忠明の手に握らせた。それは手作りのお守りだった。

「あなたはいつもお腹を出して眠む癖があります。氣をつけるのですよ」

「忝くおもいます。どうぞ、母上もお健やかで」

と礼を述べ、於濃には、

「いつの日か、また、御造りの呉がいただけるよう、修行に励みます」
と両手を握りしめた。思わず於濃はこみあげるものを必死に堪えた。

「お兄様もお健やかに」

兄の白い歯が於濃の目に光った。

忠明のあたたかな笑顔は、於濃の小さなこころの奥にしまい込まれた。
ぬくもりが於濃の体中に広がり、哀しみをあたためた。

忠明は生まれ育った母屋を見上げ、一礼すると、

「では、父上、これにて」

と別れを告げた。

若者の健脚は、あつという間に坂道を下りきり、雑林に吸い込まれていった。

雄林から先の道は、湖沼、泥濘を避けながら渡八幡社・妙源寺・院庭天神・山崎城跡・日長神社・高木城址・市杵島姫神社・庚申塚・宇頭観音の鎌倉古道を経、東海道へ出たものと思われる。

忠明が出家してから四年、今度は兎糸が急逝した。

十歳の於濃には未だ母との死別を受け止める器量がそなわってはいなかった。深い悼傷を残した。

癒えるまでには随分長い時を要した。於濃は、ひたすら堪え、ふるいたたせ、自生をめざした。その姿は健気で、哀れでさえあった。

いじらしい於濃を、そっと包みこむように、「鳥居家に生まれた男子の偏諱に〈忠〉と〈重〉の字があてがわれている。これには意味があるのだ。〈忠〉の字には〈万端に相手を思い慈しむところ〉がこめられ、〈重〉には〈従容の気心と志をもってことに当たる〉導きがこめられている。よいか、そなたにもその血が流れているのだ。きつと、そなたにも儼倅があらうぞ。」

そういつて、忠吉は於濃をなぐさめ、励ました。

爾来、忠宗、兎糸の命日と、修行僧の忠明が年に一度浄土宗西山深草派総本山誓願寺管長の遣いで三河十二本寺を訪ねる折、寸時渡里の家に立ち寄る昼時、膳を共にする習いとなった。

元龜三年一月正月某日。

於濃は、丈夫の男子を出産した。

嫡男の誕生だった。

名は、仙千代と命名された。

後の、丸岡藩主本多飛騨守成重である。

両家の年寄りの喜びは格別であった。

この朗報は即刻、浜松の重次に遣いが走った。

重次は、感無量だった。